平戸市田平地区における宗教コミュニティの形成と展開

――第３次移住地の形成と展開――

叶　堂　隆　三

目　次

はじめに
1. 長崎の信徒の移住と宗教コミュニティの形成―第３次移住地の形成―
2. 平戸市田平地区への移住の経緯
3. 田平地区における宗教コミュニティの形成
4. 宗教コミュニティの展開と常態的な他出
5. 田平地区における宗教コミュニティの形成と移住

はじめに

平戸市田平地区の田平教会は平戸の瀬戸を眼下に望む丘の上に立ち、鉄川与助による美しい聖堂は海外にも知られ、多くの巡礼者・観光客が訪問する。田平地区を含む平戸市には数多くの教会が所在し、戦国時代以来のキリスト教の普及から田平地区等は潜伏キリシタンの歴史を持つ地区と思われている。

しかし、現在の田平地区におけるカトリック信仰は、実は、明治中期以降の開拓移住によって形成されたものである。本稿は、明治中期以降の長崎県内からの田平地区への開拓移住の経緯とその後の定住と他出の状況、そして田平教会附近（田平小教区）にとどまらず周辺・隣接地区さらに長崎県外に新たな信仰共同体を形成していった状況を明らかにする。

1. 長崎の信徒の移住と宗教コミュニティの形成―第３次移住地の形成―

長崎県平戸市は、キリスト教の伝来と生月島等における隠れキリシタンの存在で有名である。戦国時代にさかのぼる平戸市の信仰の歴史から、キリスト教の継承が数世紀に及ぶと一般に想像される。実際、平戸島・生月島の中には、潜伏キリシタンからカトリック地区に移行した地区が存在する。

しかし、平戸島の宝亀地区・上神崎地区や本土側の田平地区等は、明治初期以降のカトリック信徒の移住によって形成された、いわば「新しい」宗教コミュニティである。中でも田平地区にカトリック信徒が移住し、今日の宗教コミュニティが形成されるのは、明治中期以降である。

第３次移住地

平戸市田平地区への移住を含む長崎県のカトリック信徒の移住は、江戸後期の第１次移住から第４次移住に区分できる。このうち明治中期以降の第３次移住は、主に外海地区（現長崎市）および第１次・第２次移住地で生じたもので、移動の主な要因は、外海地区および第１次・第２次移住地における明治期以降の過剰人口の発生である。この第３次移動も同様に挙家離村であるものの、この時期は営農を志向する開拓と工業都市や炭鉱等への移動が混在する。県内の工業都市や炭鉱等への移動が始まった時期とはいえ、他出世帯の多くは農業の継続と規模拡大の可能な開拓地への移住と宗教共同体の形成を志向する。

第４次移住

大正・昭和期以降も、外海地区・第１次移住地・第２次移住地とともに第３次移住地でも過剰人口が発生する。こうした状況を背景とする移動を第４次移住に位置づけることができる。この時期には工業都市や炭鉱等への移住者（世帯）がかなり増加するものの、農業の継続と移住地で宗教共同体を志向する挙家離村の世帯も多い。

この移住の特徴は、戦前および戦後の開拓政策やエネルギー政策等の国の政策が何らかの形で関与することで、この点が第３次移住との相違である。さらに農業開拓地だけでなく炭鉱や都市でも宗教共同体の形成をめざす志向性が見られる。

宗教コミュニティ形成の背景

第3移住地・第4移住地における宗教コミュニティ形成の要因として、移住地の世帯の増加と宗教コミュニティ形成への志向性をあげることができる。

① 分家の創出による世帯の増加

明治以降、外海地区および第1次移住地・第2次移住地で、多子と均分相続制による過剰人口が発生する。このうち多子は第二次世界大戦前まで日本で一般的である。とりわけカトリック信徒の場合、自然妊娠が教会法に規定された行為であったため、一般の状況を上回るものであった(1)。一方、均分相続の慣行は長崎のキリシタン・カトリック信徒に特徴的なもので、分割の状況は多様であるものの潜伏キリシタン間の信仰の継承と秘密の保持（成員の他出・離脱の抑止）が主要な理由と推測される。こうした多子傾向と均分相続が相まって、移住地に分家が多数創出されたと推測される。

さらに、多子傾向と均分相続の慣行は第3次移住地においても継続したため、第3次移住地でも過剰人口が生じる。そのため、子ども世代が家族形成期に達すると、分家の創出と農業経営の零細化という社会状況が一挙に常態化する。

② 宗教コミュニティ形成の志向性

一般に、同郷者の集住地では、出身地の生活・文化・慣習が移築される傾向にある。意図的コミュニティで生まれ育ち、第3次移住地に移動した外海地区および第1次移住地・第2次移住地の住民の場合、とりわけ宗教コミュニティ形成の志向性が高い。しかし、信仰の制度化の指標といえる教会の建設は、早い時期から移住者によって志向されるものの、その実現には一定数の信徒世帯の存在と経済状況、さらに外部の支援が関与する。

なお、宗教コミュニティは、地域社会に占める信徒の比率と信徒間の類縁（同業）関係の有無を2軸にすることで、4つの類型に分類することが可能である。外海地区および第1次・第2次移住地の宗教コミュニティは、このうち「意図的コミュニティ」に分類できる。明治中期以降に発生した第3次移住地のうち農業地区に関して、第1次・第2次移住と同様に信徒人口・世帯の増加が見られ、また信仰の共同を含む生活の共同の志向が維持される場合、「意図的コミュニティ」に分類できる。

挙家離村の背景

江戸後期以降、外海地区、第1次・第2次移住地で一般化する住民（世帯）の他出の背景として、居住地（移住地）の狭小性が指摘できる。この狭小性を要因とする他出が残存世帯の生活維持に結びつく形態を挙家離村と見ることができる。

① 居住地（移住地）の狭小性

外海地区や移住地の多くの世帯が抱える問題は、土地（農地・宅地）の狭小性であった。居住地の狭小性は、前述の信徒の人口増加と均分相続慣行に起因するだけでなく、さらに江戸末期における移住の宗教性（信仰の保持が移住地選択の条件に加わったこと）と明治期における移住の後発性（半島・山間部等への移住を余儀なくされたこと）を背景とする条件不利性によって増幅された生活問題でもある。

すなわち、数多い子ども世代の分家の創出に伴って、狭小な移住地のさらなる細分化・零細化が進行する。沿岸地域への移住の場合、小規模な漁業や他地区での漁労が生産活動に組み込まれるとはいえ、生産の基盤である農地の細分化は臨界点に達し、移住地内の分家の創出が困難になる。その結果、新たな（農業）開拓移住や近隣のカトリック地区への他出が頻出する。同時に移住地の農業生産の条件不利性は、開拓地への移住の直後から世帯流出を促進する要因にもなる。

一方、第2次・第3次移住地の中に、生産基盤が農業外に転換した移住地が出現する。こうした移住地では、初期の移住世帯の分家の創設に加えて、漁労等に従事する新しい世帯（信徒世帯・非信徒世帯）が来住するため、移住地における住宅地の不足が発生する。同時に農地の所有が生活条件からはずれるため、開拓移住地の周辺への分家世帯の流出と来住世帯の居住が始まる。

② 挙家離村による人口の流出

移住地における常態的な挙家離村による世帯の流出は、生活向上をめざす他出世帯の家族戦略である。すなわち、移住地における零細規模の農業やリスクのある漁労との兼業という生活形態から脱却し、一定規模の農業経営を実現するための数少ない方策が、挙家離村による開拓移住である。

それは、同時に移住地に残存する世帯の生活維持を実現する「隠れた」役割を果たす。すなわち、農地・家屋の売却資金を基に開拓移住地で一定規模の

農業経営をめざす挙家離村の世帯の出現は、残留世帯に農地・家屋を提供することになり、残留世帯は経営規模の拡大あるいは経営規模を維持したままでの分家の創出を可能になる。

こうした他出傾向は、第3次移住地においても持続したと想定される。しかし、第2次移住地までの宗教目的（信仰の秘匿）が移住地の選択条件からはずれたことで、移住地の選択に変化が生じた可能性がある。また第3次移住が日本の産業化・都市化の時期にあたるために、都市等をめざす新たな他出が広がったと推測される。

一方、生産の基盤が農業外に大きく展開した場合、移住地（中心）の周辺への分家世帯の流出と来住世帯の居住傾向が生じる。しかし分家・来住世帯が移住地（中心地）の生産と宗教施設に依存する関係にあるため、いわば宗教共同体の拡大といえる状況である。

本稿の目的

本稿の第1の目的は、第3次移住地に位置づけられる長崎県平戸市田平地区（田平小教区）を事例にして、田平地区（田平小教区および旧田平町全体と旧新御厨町を含む）への移住の経緯と宗教コミュニティ形成の状況を解明することである。また第2の目的は、田平地区（小教区）から信徒の居住が展開した周辺・隣接地区のうち平戸市の平戸口小教区、平戸市・松浦市御厨地区をまたぐ西木場小教区さらに福岡県西区能古島大泊地区への定住の経緯と宗教コミュニティ形成の一端にふれることである。

まず、第1の目的に関して、第3次移住地の田平地区の具体的な状況の把握をめざす。①明治中期の開拓移住時の住民の状況、②既存・来住の世帯間の出身地区の相違、の把握を通して、田平地区への定住と宗教コミュニティの展開の社会的特徴を明らかにする。また③世帯の来住の継続の状況と④田平地区からの他出状況、の把握によって、来住世帯と他出世帯が同時発生した地域的要因を明らかにする。

第2の目的に関して、明治中期の移住地である田平地区（小教区）から田平地区（旧田平町）・松浦市御厨地区に信徒世帯の居住地が拡大した状況の把握をめざす。第2次移住地の場合、生産基盤に大きな転換が生じた地区で、非農業の信徒世帯が周辺地域で増加している。第3次移住地の田平地区に関して、①田平教会付近からの居住の拡大の社会的背景の解明を試みる。また②周辺・隣接地区における教会の設立と小教区独立の経緯を把握して、宗教コミュニティの展開の条件の解明をめざす。さらに③田平地区からの第4次移住の事例として、福岡市能古島大泊地区への移住と教会設立の状況を明らかにする。

こうした本稿の目的に沿って、第2節の平戸市田平地区への移住の経緯および第3節の田平地区における宗教コミュニティの形成において、第1の目的の①・②・③の解明を試みる。次に第4節の宗教コミュニティの展開と常態的な他出において、第2の目的の①・②・③と第1の目的の④の解明を試みる。最後に、第5節の田平地区における宗教コミュニティの形成と移住において、田平地区への移住と宗教コミュニティの社会的特徴を検討する。

2. 平戸市田平地区への移住の経緯

長崎県平戸市田平地区に、江戸末期・明治初期、キリシタンが居住していたという記録がある。しかし、現在のコミュニティを形成するのは、明治中期以降に開拓移住した世帯である。その点で、田平地区は第3次移住地に区分できる。本節では、まず田平地区の概況を示し、次に明治中期以降の田平地区への開拓移住の経緯を明らかにする。

田平地区の概況

平戸市田平地区は、図2.1のように、北部九州の西端に位置し、その大半は丘陵地帯である。図2.2に示した田平地区（旧田平町）は、明治期の市制町村制において北部に田平村（現在の里免・岳崎免・下亀免・上亀免・小崎免・福崎免・横島免で構成）が単独で誕生し、南部に旧小手田村（荻田免を含む小手田免・山内免・野田免・大久保免・一関免・本山免で構成）と旧下寺村（下寺免・以善免・深月免・田代免・古梶免と現在の江迎町末橘免で構成）の合併で南田平村が誕生する。さらに昭和期の町村合併促進法で田平村と南田平村の二村が合併して田平町になり、平成期（2005年）に平戸市・生月町・大島村との合併で、現在の平戸市の一部となる。なお、本稿では、主として明治中期〜昭和初期に移住が見られた荻田免を含む小手田免・下寺免・

図 2.1　長崎県北部

図 2.2　平戸市田平地区

表 2.1　田平町の人口

旧村名	免		2005 年	2010 年	2014 年
旧南田平村	野田免	人口	192	173	174
		世帯数	74	75	89
	大久保免	人口	574	509	541
		世帯数	237	226	235
	本山	人口	88	74	69
		世帯数	26	25	23
	山内免	人口	1604	1575	1565
		世帯数	674	682	702
	一関免	人口	130	119	133
		世帯数	43	42	46
	荻田免	人口	392	364	325
		世帯数	135	144	136
	田代免	人口	88	80	80
		世帯数	30	28	31
	古梶免	人口	118	118	103
		世帯数	83	83	76
	深月免	人口	530	536	518
		世帯数	197	205	211
	以善免	人口	195	192	173
		世帯数	71	75	73
	下寺免	人口	578	536	502
		世帯数	197	218	218
	小手田免	人口	1077	1032	1013
		世帯数	407	416	427
	合計	人口	5566	5308	5196
		世帯数	2174	2219	2267
旧田平村	里免	人口	809	762	723
		世帯数	293	302	301
	下亀免	人口	397	360	352
		世帯数	137	136	141
	上亀免	人口	122	109	94
		世帯数	38	39	42
	小崎免	人口	319	299	285
		世帯数	108	116	121
	福崎免	人口	299	291	282
		世帯数	103	106	104
	岳崎免	人口	154	143	144
		世帯数	52	55	58
	合計	人口	2100	1964	1880
		世帯数	731	754	767
旧田平町全体		人口	7666	7272	7076
		世帯数	2905	2973	3034

注：『平戸市人口統計』の町別人口統計の数値に基づいて作成した。

表 2.2　田平地区の世帯状況と信徒世帯数

旧村名	免	集落名		1970年	1980年	1990年	2000年	2010年
旧南田平村	野田免	野田	世帯数	78	80	78	104	74
		信徒世帯数 0 ・18	農家数	35	25	19	18	12
	大久保免	永久保・大崎・釜田	世帯数	139	175	171	163	166
		信徒世帯数 1 ・34	農家数	64	44	28	15	47
	山内免	山内・永田	世帯数	140	95	188	664	681
		信徒世帯数 0 ・40	農家数	31	22	26	25	13
	一関免	米の内	世帯数	75	89	85	117	71
		信徒世帯数 0 ・ 0	農家数	51	43	37	34	31
	荻田免	東荻田・西荻田・南荻田	世帯数	126	123	119	134	129
		信徒世帯数 50・ 0	農家数	95	79	66	51	27
	田代免	田代	世帯数	26	24	24	27	30
		信徒世帯数 3 ・ 0	農家数	24	21	21	19	10
	古梶免	古梶	世帯数	23	21	19	23	83
		信徒世帯数 1	農家数	17	17	14	12	11
	深月免	深月	世帯数	79	76	72	64	52
		信徒世帯数 20・ 0	農家数	30	19	12	9	6
	以善免	万場・以善	世帯数	114	149	144	169	183
		信徒世帯数 33・ 0	農家数	88	78	64	53	33
	下寺免	下寺・外目・生向	世帯数	170	163	155	162	167
		信徒世帯数 65・ 1	農家数	124	111	80	63	40
	小手田免	小手田・坊田	世帯数	157	177	174	225	224
		信徒世帯数 79・ 7	農家数	80	61	47	42	20
旧田平村	里免	下里・上里	世帯数	38	133	130	170	134
		信徒世帯数 3 ・ 8	農家数	32	30	27	24	13
	下亀免	下亀	世帯数	110	85	83	125	138
		信徒世帯数 0 ・ 2	農家数	46	50	48	44	34
	上亀免	上亀	世帯数	40	37	36	36	38
			農家数	34	31	29	31	19
	小崎免	小崎	世帯数	103	100	97	95	113
			農家数	68	59	52	47	33
	福崎免	福崎	世帯数	97	97	90	99	104
			農家数	70	63	53	51	33
	岳崎免	岳崎	世帯数	43	40	41	42	50
		信徒世帯数 0 ・14	農家数	27	21	16	14	9

注：『2010 年世界農林業センサス集落カード』（一般財団法人農林統計協会）を基に作成した。
：信徒世帯数は左の数字が 1986 年の田平教会、右の数字が 2002 年の平戸口教会の信徒世帯数である。西木場教会の信徒世帯数は未入手である。

以善免・深月免・田代免の範囲を田平地区（小教区）と表記して、田平地区全体の田平地区（旧田平町）と区別する。

旧田平町の人口・世帯数を示したものが、表 2.1 である。2014 年現在、人口 7076 人、世帯数 3034 世帯である。約 10 年前（2005 年）と比較すれば人口約 600 人、世帯数約 130 世帯減少している。旧村別では、旧南田平村 5196 人・2267 世帯、旧田平村 1880 人・767 世帯である。1874（明治 7 ）年の区別町村調べでは、旧小手田村は人口 2249 人・516 世帯、旧下寺村は人口 1276 人・291 世帯である（長崎県の地名 539-541 頁）。両村を合わせれば、明治初期の旧南田平村の範域は人口 3525 人・807 世帯である。

また、表 2.2 は、旧田平町の 1970 年代以降の世界農業センサスにおける世帯数及び営農状況を示したものである。1970 年代の農家世帯の割合は約 6 割（旧南田平 56.7%・旧田平村 64.3%）に及ぶ。農地は丘陵地に広がっていて、主な作目は野菜・花卉、加えて畜産も盛んである。田平地区の農家の比率は、その後、1980 年 46.5%、1990 年 37.5%、2000 年 22.8%と約 1 割程度ずつ減少するものの、2010 年で 18.3%と約 2 割の比率を占めて、地区の主産業にとどまっている。

水産業に関して、大正時代の田平村の漁業者は 14（専業 10）、南田平村は 145（専業 83）で、漁労

組織は共同経営あるいは単独経営で、ブリ網・イワシ刺し網・縫切網であった。また漁業者の世帯の9割が農業と兼業であった（田平郷土誌 218 頁）。その後、漁船が大型化し、生産高も増大したという。田平地区の漁港は、田平港・深月港・釜田漁港・一六漁港・生向漁港である（田平郷土誌 281-283 頁）。なお田平地区の信者の多くが、田平地区外の網元・漁業会社で漁労に従事していたという。

田平地区の交通は、国道 204 号線で佐世保市と松浦市の間が結ばれ、平戸口と佐世保市および松浦市の間を西肥バスが運行している。また松浦鉄道によって、佐世保市・平戸口間が結ばれている。指呼の距離にある対岸の平戸島とは、1977 年、平戸大橋で結ばれている。

移住の時期

江戸末期・明治初期、田平地区にキリシタンが居住していたものの、田平教会のほとんどの信徒は 1886（明治 19）年以降に開拓移住した人びとの系譜の世帯である[2]。1886（明治 19）年以降の田平地区への移住は、長崎県のキリシタン・カトリック信徒の第 1 次移住・第 2 次移住に共通する他出の要因―多子傾向および均分相続による狭小地での多数の分家の創出と生産活動における条件不利性―によると推測できる。

明治中期の田平地区への移住は、佐世保市黒島地区および長崎市外海地区（出津）からの教役者（外国人司祭）の主導である。黒島地区からの移住の開始は、黒島教会のラゲ神父が田平地区横立の山野 1 町歩を購入し黒島の 3 世帯を開拓開住させたこと、外海地区からの移住の開始は、出津教会のド・ロ神父が田平地区の山野 1 町歩を購入し出津の信徒 3 家族を開拓移住させたことである（信仰告白 125 周年黒島教会の歩み 101 頁・外海町史 596 頁）。

田平への移住の時期は、表 2.3 のように、外海地区は 1886（明治 19）年～1899（明治 32）年の間に外海地区全体の移住世帯の 8 割強の 46 世帯が移住し、黒島・五島・平戸の各地区に先行している。一方、黒島地区は 1886

田平地区（小手田免）

表 2.3　田平地区への移住時期

大字	小字	移動時期	黒島	外海	五島	平戸
下寺免	横立・江里山・瀬戸山	合計	3	15	0	0
		1886 年～1889 年	3	12	-	-
		1890 年～1899 年	-	3	-	-
下寺免・小手田免	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	合計	5	24	2	0
		1886 年～1889 年	1	1	-	-
		1890 年～1899 年	2	18	2	-
		1900 年～1909 年	1	2	-	-
		1910 年～1919 年	1	2	-	-
		1920 年～1929 年	-	1	-	-
下寺免・以善免	外目・以善・万場・下寺	合計	19	16	0	1
		1886 年～1889 年	-	-	-	-
		1890 年～1899 年	2	12	-	-
		1900 年～1909 年	9	3	-	1
		1910 年～1919 年	7	1	-	-
		1920 年～1929 年	1	-	-	-
大久保免・野田免	永久保・野田	合計	3	2	1	4
		1886 年～1889 年	-	-	-	-
		1890 年～1899 年	1	-	-	-
		1900 年～1909 年	1	1	1	-
		1910 年～1919 年	1	1	-	1
		1920 年～1929 年	-	-	-	1
岳崎免	岳崎	合計	0	0	9	0
		1886 年～1889 年	-	-	-	-
		1890 年～1899 年	-	-	-	-
		1900 年～1909 年	-	-	9	-
		1910 年～1919 年	-	-	-	-
		1920 年～1929 年	-	-	-	-
荻田免	荻田	合計	3	0	0	3
		1886 年～1889 年	-	-	-	-
		1890 年～1899 年	-	-	-	-
		1900 年～1909 年	-	-	-	1
		1910 年～1919 年	2	-	-	-
		1920 年～1929 年	1	-	-	2

注：浜口勇『瀬戸の十字架』（16-21 頁）を基に作成した。

年の最初の移住後に移住が途絶え、約 10 年後の 1895（明治 28）年以降に再び活発になり、25 年間に 26 世帯が移住している。さらに 1920 年以降も 3 世帯が移住をし、長期間にわたる移住が特徴である。

五島地区は早い時期（1890 年～1894 年）に 2 世帯が移住するものの、1900 年～1909 年の 10 年間に 10 世帯の移住が集中し、時期的に黒島地区に遅れる。平戸地区の移住はさらに後発で、1900 年以降である。1900 年～1904 年に 3 世帯が移住し、その後の 25 年間に 5 世帯が移住している。

黒島からの移住

黒島の信徒の移住は、明治中期から昭和初期の間で、黒島の調査で 59 世帯（信仰告白 125 周年黒島教会の歩み 101 頁）で、田平の調査で 33 世帯に及ぶ（浜崎 16-21 頁）。両者の数字の相違は、近接地の旧新御厨町西木場地区への移住世帯の有無と田平地区への定着状況（離脱の世帯数）に由来すると推測される。

田平の調査で判明した居住地別の世帯主に黒島で判明した出身集落を加えたものが表 2.4 である。居住地別では、ラゲ神父が土地を購入した下寺免の横立に 3 世帯、小手田免の牟田・下寺免の瀬戸山・五島ヶ原に 5 世帯（名切 2 ・田代 1 ）、下寺免の外目・下寺・以善免の以善・万場に 19 世帯（東堂平 6 ・根谷 3 ・名切 2 ・田代 1 ）、大久保免の永久保・野田免の野田 3 世帯（東堂平 1 ・根谷 1 ）、荻田免の荻田 3 世帯（根谷 1 ）である。すなわち、黒島出身世帯は下寺免・以善免・荻田免に居住するとともに、やや離れた大久保免・野田免にも居住する。黒島の出身集落別では、東堂平集落の出身者が下寺免・以善免に居住する傾向が見られる。

表 2.4　黒島からの移住者

移住地区	移住時期	世帯数	備考	世　　帯　　名
横立	明治 19 年	3	ラゲ神父購入地	辻小一・永井土井蔵・瀬崎藤次郎
牟田・瀬戸山・五島ヶ原	明治 20 年	1	自費	永谷和吉（田代）
	明治 29 年	2	自費	山口庄五郎・浅田万吉（名切）
	明治 37 年	1	自費	竹本弥重（森川弥十・名切）
	大正 5 年	1	自費	山内喜八　＊山内姓は名切・東堂平・根谷
外目・以善・万場・下寺	明治 29 年	1	自費	谷口金助（東堂平）
	明治 30 年	1	自費	吉田熊太郎　＊吉田姓は名切
	明治 33 年	2	自費	友永助太郎・浜元甚太郎（浜本甚右衛門・東堂平）　＊友永姓は東堂平
	明治 36 年	2	自費	池田治吉（池田利吉・東堂平）・谷口峰造（東堂平）
	明治 38 年	1	自費	山口籐八（東堂平）
	明治 39 年	1	自費	吉田千代作（名切）
	明治 40 年	1	自費	内野富蔵　＊内野姓は蕨
	明治 42 年	2	自費	山内郡作（根谷）・山内富市（山内留市・名切）
	大正 元 年	1	自費	溝口郡平（東堂平）
	大正 3 年	3	自費	永谷万吉（田代）・松口見八・橋本留造（根谷）
	大正 6 年	2	自費	永田兼松（根谷）・市瀬松次郎（田代）
	大正 7 年	1	自費	岡甚松
	大正 10 年	1	自費	橋本福市
永久保・野田	明治 29 年	1	自費	末吉幹太夫（末吉幹太郎・東堂平）
	明治 40 年	1	自費	樫山長太（樫山長之助・根谷）
	大正 6 年	1	自費	浅田徳次郎　＊浅田姓は名切
荻田	大正 3 年	1	自費	橋本福蔵（根谷）
	大正 8 年	1	自費	岩田伍七
	昭和 元 年	1	自費	末吉紋重　＊末吉姓は東堂平

注：浜口勇『瀬戸の十字架』（16-21 頁）を基に作成した。
：（　）内の黒島の集落名と＊の人名は『信仰告白 125 周年―黒島教会の歩み』から明らかになった事項を示している。

表 2.5　外海地区からの移住世帯

移住地区	移住時期	出身地	世帯数	備考	世　帯　名
横立	明治 19 年	出津	4	ド・ロ神父購入地	今村丈吉・島田徳蔵・山口増太郎・岩上浅衛門
江里山	明治 21 年	出津	8	ド・ロ神父購入地	大石紋三郎・松下多市・古川辰次郎・川崎源一・瀬上常吉・今村庄衛門・島田又衛門・川原万吉
瀬戸山	明治 26 年	出津	3	ド・ロ神父購入地	川原久平・川原喜作・川原十兵衛
牟田・瀬戸山・五島ヶ原	明治 21 年	黒崎	1	自費	山崎弥六
	明治 27 年	黒崎	11	自費	田川久太・堤幸三・辻村和吉・田中貞吉・高野芳太郎・尾下武助・堤茂四郎・田川忠八・松尾与八・松尾与惣次・堤倉吉
	明治 25 年	黒崎	2	自費	大木卯平・竹山佐吉
	明治 27 年	出津	1	自費	川原幸之十
	明治 29 年	出津	1	自費	高野仙吉
	明治 29 年	黒崎	2	自費	田川留吉・田川与作
	明治 32 年	出津	1	自費	古川弥蔵
	明治 35 年	黒崎	1	自費	浜口才五郎
	明治 41 年	黒崎	1	自費	田口与三
	明治 43 年	出津	2	自費	浜崎竹造・高野末太郎
	大正 9 年	黒崎	1	自費	平本友作
外目・以善・万場・下寺	明治 25 年	出津	2	自費	出口村市・出口荒八
	明治 26 年	出津	2	自費	尾下辰次郎・浜崎又五郎
	明治 29 年	出津	2	自費	川崎辰五郎・川崎礼造
	明治 30 年	出津	3	自費	原口住造・尾下新五郎・高野吉次郎
	明治 30 年	赤首	1	自費	久松五右衛門
	明治 30 年	黒崎	1	自費	田川十吉
	明治 31 年	出津	1	自費	赤石権平
	明治 37 年	黒崎	1	自費	出口ハセ
	明治 39 年	大野	2	自費	黒川熊吉・横岩末吉
	大正 8 年	赤首	1	自費	横岩カヤ
永久保・野田	明治 37 年	出津	1	自費	赤石助五郎
	明治 43 年	三重	1	自費	松下清八

注：浜口勇『瀬戸の十字架』(16-21 頁）を基に作成した。

表 2.6　五島・平戸からの移住者

移住地区	移住時期	出身地	世帯数	備考	世　帯　名
牟田・瀬戸山・五島ヶ原	明治 25 年	五島	2	自費	吉原捨五郎・西村善之助
外目・以善・万場・下寺	明治 41 年	上神崎	1	自費	田村宇之助
永久保・野田	明治 37 年	五島	1	自費	瀬戸平吉
	明治 37 年	平戸	1	自費	池田長八
	明治 37 年	宝亀	1	自費	佐々木多蔵
	大正 元 年	宝亀	1	自費	松山喜衛門
	大正 11 年	上神崎	1	自費	牧野金七
岳崎	明治 35 年	五島	1	自費	山田礼造
	明治 36 年	五島	1	自費	川畑松佐
	明治 39 年	五島	4	自費	赤波江熊吉・肥喜里半五郎・田上金助・瀬戸兵太郎
	明治 40 年	五島	1	自費	赤波江金作
	明治 41 年	五島	2	自費	大木栄作・森川源造
荻田	明治 36 年	宝亀	1	自費	横山増太郎
	大正 15 年	宝亀	1	自費	木村富市
	昭和 元 年	紐差	1	自費	谷山仁七

注：浜口勇『瀬戸の十字架』(16-21 頁）を基に作成した。

外海からの移住

一方、外海地区からの移住は、下寺免の横立への最初の4世帯の移住の2年後（1888年）にもド・ロ神父が下寺免の江里山の土地（3町3段余）と下寺免の瀬戸山の土地を購入し、それぞれに8世帯・3世帯が移住する（瀬戸の十字架14-15頁）[3]。

表2.5は、明治中期から大正期の外海地区からの移住世帯を示したものである。外海地区の出身地は、出津31世帯、黒崎21世帯、大野2世帯、赤首2世帯・三重1世帯である。居住地別では、ド・ロ神父が土地を購入した下寺免の横立に4世帯（出津4）、同じく下寺免の江里山に8世帯（出津8）、小手田免の牟田・下寺免の瀬戸山・五島ヶ原に24世帯（黒崎19・出津5）、下寺免の外目・下寺・以善免の以善・万場に16世帯（出津10・黒崎2・大野2・赤首2）、大久保免の永久保・野田免の野田に2世帯（出津1・三重1）である。つまり、外海からの移住は、下寺免・小手田免・以善免が大半である。

五島・平戸からの移住

表2.6は、五島・平戸からの移住世帯（五島12世帯・平戸8世帯）を示したものである。小手田免の牟田・下寺免の瀬戸山・五島ヶ原に五島2世帯、

表2.7　褥崎地区からの移住と婚姻関係

家	世代	名前	田平への移住・婚姻関係	田平地区の記載	田平小教区の同姓世帯数	平戸口小教区の同姓世帯数
新立福蔵・吉浦忠蔵・吉浦藤七家	第4世代	新立卯作	1891年生れ。田平に移住	戦没者：下寺1・福崎1	横立2・江里山1	新立姓0
	第4世代	新立時春	田平の女性と婚姻			
	第4世代	新立ハルエ	田平の古川正秀と婚姻		古川姓7	古川姓0
	第3世代	吉浦藤ザネ	1928年に子どもとともに田平に移住	戦没者：小手田1・福崎3	吉浦姓0	吉浦姓0
新立宗ヱ門家	第4世代	新立優	田平の女性(今村家)と婚姻		今村姓17	今村姓0
	第4世代	新立武雄	子どもとともに田平に移住。長女は田平の中尾謙吾・次女は末兼義満・三女は中尾保明と婚姻。	戦没者：下寺1・福崎1	横立2・江里山1	新立姓0
浦田長蔵家	第5世代	浦田恵美子	田平の川崎勉と婚姻		川崎姓0	川崎姓0
	第5世代	浦田サツエ	田平の田上藤光と婚姻		田上姓0	田上姓3（山内1・岳崎2）
	第4世代	浦田スエノ	田平の田川藤松と婚姻		田川姓23	田川姓2（山内）
	第3世代	樫山吉太郎	子どもとともに加勢炭鉱、その後1936年に田平移住	戦没者：小手田1	横立2・外以万下4	樫山姓1（大久保）
	第2世代	樫山末太郎	1933年に子どもとともに田平に移住			
	第5世代	樫山加代子	夫は田平の樫山次男		横立2・外以万下4	
山村茂吉家	第5世代	山村孝行	田平の女性(赤石家)と婚姻		赤石姓0	赤石姓2（大久保）
	第3世代	山村辰右ヱ門	1924年に子どもとともに田平に移住		山村姓0	山村姓0
吉浦久米蔵家	第4世代	吉浦博昭	田平の女性(今村家)と婚姻	戦没者：小手田1・福崎3	吉浦姓0	吉浦姓0
梅田金六家	第1世代	梅田藤平	黒島(白馬)－黒島(東堂平)－大垣(平戸)－田平(馬の元)－田平(大久保)－田平ののちに褥崎に移住		江里山1	梅田姓1（山内）
	第2世代	梅田ミチ	田平の竹内市ェ門と婚姻		竹内姓0	竹内姓0
	第3世代	梅田フジエ	田平の森川清と婚姻		森川姓0	森川姓2（大久保1・岳崎1）
	第2世代	梅田清則	田平移住		江里山1	梅田姓1（山内）
	第2世代	梅田政好	田平の女性(山内家)と婚姻		山内姓4	山内姓0

注：『褥崎128年―褥崎小教区沿革史―』（別冊付録）の家系図・『永遠の潮騒―田平カトリック教会創設100周年―』・『平戸口小教区史―献堂50周年記念―』を基に作成した。
：田平小教区の同姓世帯数は1986年、平戸口小教区の同姓世帯数は2002年の数値である。

下寺免の外目・下寺・以善免の以善・万場に平戸１世帯（上神崎１）、大久保免の永久保・野田免の野田に五島１世帯・平戸４世帯（平戸１・宝亀２・上神崎１）、岳崎免に五島９世帯である。すなわち、五島および平戸からの移住は、黒島・外海地区の出身者が多い小手田免・下寺免・以善免は少なく、大半が大久保免・野田免・岳崎免である。なお、荻田免は平戸地区（宝亀２・紐差１）と黒島地区が混在する。

その他の地域からの移住

田平地区には、黒島・外海・五島・平戸地区以外からも移住者が存在する。その一例が表 2.7 の佐世保市褥崎地区である。田平地区への移住は７世帯で、そのうち移住時期の判明する４世帯は大正末～第二次世界大戦前の移住である。この時期が黒島・外海・五島・平戸地区よりも遅いこと、移住先が現在の田平地区（小教区）とともに西木場小教区の福崎地区であることが特徴的である。

田平における居住地

このように田平地区への移住は、出身地および移住時期によって地区内の居住地が規定される傾向にある。すなわち、早い時期に移住した外海地区からの出身世帯は、大半が下寺免・小手田免・以善免に居住し、遅れて移住した世帯が、大久保免・野田免に移住する。黒島地区からの出身世帯も大半（４分の３）が下寺免・小手田免・以善免に居住し、やや遅れて移住した世帯が大久保免・野田免、さらに遅い世帯が荻田免に居住する。なお、黒島出身の世帯は比較的裕福で、1896（明治 29）年以降の移住世帯の多くが「開拓から始める人は少なく、相当良いところを買い求めた」（浜崎 29 頁）という。

五島地区からの出身世帯のほとんどは岳崎免に居住し、移住時期も 10 年間に集中する。それ以前は下寺免・小手田免の居住が見られ、岳崎免と同時期に大久保免・野田免への移住が見られる。平戸地区からの移住の時期は最も遅く、多くが大久保免・野田免と荻田免に集中する。他に下寺免・以善免への移住が見られる。

移住直後の生活

田平地区では開墾した畑を鍬で耕し、畑の肥料は海岸の藻を施したという。しかしこれまで農業に利

表 2.8　田平移住者の主な副業

副業		居住地	出身地	備　　考
製粉	今村丈吉	江里山	出津	移住者リストに掲載
	松下多市	横立	出津	移住者リストに掲載
竹細工	川崎辰五郎	外目・以善・万場・下寺	出津	移住者リストに掲載
	久松五右衛門	外目・以善・万場・下寺	赤首	移住者リストに掲載
	川原光蔵		出津	川原姓は出津出身５世帯
鍼灸	尾下新五郎	外目・以善・万場・下寺	出津	移住者リストに掲載
	出口キヨ			出口姓は、出津・黒崎出身各１世帯
	古川松之介	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	出津	古川姓は出津出身１世帯
骨接ぎ	浜崎又五郎	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	出津	浜崎姓は出津出身１世帯
灸・骨接ぎ	瀬戸平吉	永久保・野田	五島	移住者リストに掲載
	池田長八	永久保・野田	平戸	移住者リストに掲載
桶製造	高野忠平			高野姓は出津出身３世帯・黒崎出身１世帯
石垣築	今村紋太		出津	今村姓は出津出身２世帯
	松下多六	江里山	出津	松下姓は２世帯。名前・時期で多市の家族と判断。
	古川久次郎	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	出津	古川姓は出津出身１世帯
挽臼の目立て	松下多市	横立	出津	移住者リストに掲載
木挽き	吉村三五郎			その後、1899（明治 32）年迄に他出。
	瀬崎鹿之助	横立	黒島	瀬崎姓は黒島出身１世帯
	高野吉次郎			高野姓は出津出身３世帯・黒崎出身１世帯
大工				移住者の最高の職と言われ、高収入。

注：浜口勇「瀬戸の十字架」の 28 頁の記載と 16-21 頁の表から作成した。

用できなかった丘陵地は十分な野菜生産をもたらすものではなく、一通りの開墾作業を終えると畑作とともに漁業・山仕事・職人仕事で収入を確保している。田平地区では兼業や副業は出身地による特徴があったという。外海地区の黒崎出身者は同郷者で船を購入して運送業に従事したり、山を購入して薪の商売に従事し、同じ外海地区でも出津出身者は、雇われて仕事に従事することが多かったという。黒島地区と五島地区の出身者の多くは漁業に従事する。とりわけ黒島地区の出身者が従事したのが延縄漁である。一方、平戸地区の出身者は、主として大地主の下で小作に従事する（浜崎 29 頁）。

また、個人の経験や特技による副業もさまざまである（浜崎 28 頁）。表 2.8 は、移住者の副業の主なものである。本業に関連する製粉、林業の木挽き、居職の竹細工・桶製造、出職の石垣築・大工、保健医療の鍼灸・骨接ぎ等で、移住世帯のさまざまな生活ニーズに対応して副収入を得ていたことが分かる。このうち製粉は、開墾地で裸麦ができなかったものの小麦がとれたために注文が多く、加えて信徒世帯以外からも需要があったという。また大工は移住者の最高の職で収入も多く、大工の妻は七度生まれ変わらなければなれない羨望の的だったという（浜崎 28 頁）。

移住直後の居住環境は掘立小屋での生活である。その後、縦三間、横二間の草ふきの家に造り変っていったという。また開拓地の農業は畑作で米食はまれで、常食はいもとカンコロであった（浜崎 26-27 頁）。

大正・昭和初期には、農作業に加えて漁業に従事したり炭鉱で働く信徒が多くなる。漁業の場合、「地元の人々ができない荒海稼業は、かれらの最も得意な仕事で、大島、生月、五島沖などに出漁し、あるいは大きな網元の下で、あるいは個人で、はえなわ漁業に懸命に働いた」（浜崎 124 頁）という。同時に、海難事故や炭鉱の事故で亡くなる信徒も多くなる。

表 2.9　田平地区への移住の時期

	黒島	外海	五島	平戸	合計
1886(明治 19)年～1889(明治 22)年	4	13			17
1890(明治 23)年～1894(明治 27)年		21	2		19
1895(明治 28)年～1899(明治 32)年	6	12			22
1900(明治 33)年～1904(明治 37)年	3	2	3	3	12
1905(明治 38)年～1909(明治 42)年	6	4	7	1	17
1910(明治 43)年～1914(大正　3)年	5	3		1	8
1915(大正　4)年～1919(大正　8)年	6	1			7
1920(大正　9)年～1924(大正 13)年	2	1		1	4
1925(大正 14)年～1929(昭和　4)年	1	0		2	3
合計	33	57	12	8	110

注：浜口勇『瀬戸の十字架』（16-21 頁）を基に作成した。

居住地の展開

1886（明治 19）年の移住の以降、田平地区のカトリック信徒世帯は増加を続ける。1929 年の信徒世帯数は来住の世帯だけで 110 世帯を超える。

表 2.9 は 1965 年、浜崎勇による各世帯の訪問調査の結果である。田平地区への来住世帯は、1886～1889（明治 19～22）年に 16 世帯、1890～1899（明治 23～32）年に 38 世帯、1900～1909（明治 33～42）年に 31 世帯、1910～1919（明治 43～大正 8 ）年に 16 世帯、1920～1929（大正 9 ～昭和 4 ）年に 6 世帯で、1986 年の草分けの 4 世帯の移住後の 10 数年後に 60 世帯、四半世紀後に 91 世帯、約 30 年後に 100 世帯を超える。こうした来住世帯の中には他出した世帯も見られる。しかし、田平地区に定着した世帯では、さらに「分家や出生などで……ますますふえ」（浜崎 37 頁）て、かなりの世帯数に達する。

表 2.10 は、1886（明治 19）年の草分けの移住から 1929（昭和 4 ）年まで 43 年間の世帯状況と草分けの移住から 1 世紀後の 1986（昭和 61）年の世帯状況を示したものである。明治～昭和初期に関する居住区分の範域と 1986 年の信徒組織の下位単位の範域が必ずしも一致していないこと、両時期の同姓世帯の対照のために正確性に欠けるものの、大まかな趨勢は把握できる（なお、1952 年に西木場・平戸口の小教区の分離があったため、永久保・野田と岳崎地区は集計から外している）。

まず、最初の移住からの約 40 年間の 87 世帯（永久保・野田地区と岳崎地区の 19 世帯を除く）は、移住時と同じ地区内で 144 世帯、移住と異なる地区で 53 世帯の合計 197 世帯に増加している。すなわち、平均 1.3 世帯の分家を創出し、出身地別では、外海出身は 52 世帯が 125 世帯（移住地区 88 世帯・地区外 37 世帯）、黒島出身は 29 世帯が 66 世帯（移住地区 53 世帯・地区外 13 世帯）、五島出身・平戸

表 2.10　田平地区（小教区）への移住世帯と 1986 年の居住世帯

移住地区	外海地区からの移住世帯			黒島からの移住世帯			五島・平戸からの移住世帯			1929 年に名前のない世帯			
	世帯の姓	1929年までの世帯数	1986年の世帯数	世帯の姓	1929年までの世帯数	1986年の世帯数	世帯の姓	1929年までの世帯数	1986年の世帯数	世帯の姓	1986年の世帯数	世帯の姓	1986年の世帯数
横立	**今村**	1	10	辻	1	1				**内野＊黒島**	2	真浦	1
	島田	1		永井	1					**出口＊外海**	1	**松尾＊外海**	1
	山口	1		瀬崎	1	1				**川原＊外海**	2	牧山	1
	岩上	1								樫山	2	道下	1
										新立	2	宮沢	1
										瀬上＊外海	1	森中	3
										瀬戸＊五島	1	**山口＊外黒**	1
										夫都木	1	**吉原＊五島**	1
										橋本＊黒島	1	秋村	1
	合計	4	10		3	2		0	0				24
江里山	大石	1	4							**池田＊黒五**	1		
	松下	1	2							古賀	1		
	古川	1	3							新立	1		
	川崎	1								藤村	1		
	瀬上	1	1							山内＊黒島	1		
	今村	1								梅田	1		
	島田	1	1										
	川原	1											
	合計	8	11		0	0		0	0		6		0
牟田・瀬戸山・五島ヶ原	**川原**	4	5	永谷	1	1	**吉原(五)**	1	0	末永	4	西田	1
	山崎	1	1	**山口**	1	6	**西村(五)**	1	1	広川	2	**橋本＊黒島**	2
	田川	4	19	浅田	1	1				宮崎	1	濱道	1
	堤	3	4	竹元	1	1				山見	1		
	辻村	1	5	**山内**	1	7				秋永	1		
	田中	1	1							木下	1		
	高野	3	4							古里	1		
	尾下	1	0							**池田＊黒五**	2		
	松尾	2	0							伊藤	1		
	平本	1	1							**今村＊外海**	1		
	大木	1	3							萩原	1		
	竹山	1	1							**原口＊外海**	4		
	古川	1	3							徳永	1		
	浜口	1	1							前田	2		
	田口	1	0							今野	1		
	浜崎	1	3							嘉松	3		
	合計	27	51		5	16		2	1				31
外目・以善・万場・下寺	**出口**	2	3	谷口	2	2	田村(平)	1		川本	1	**島田＊外海**	1
	川崎	2	1	吉田	2	3				樫山	4	**浜崎＊外海**	4
	原口	1	1	友永	1	2				田舞	1	溝口	2
	尾下	1	3	浜元(本？)	1	3				永石	1		
	高野	1	0	**池田**	1	0				野田	1		
	久松	1	1	**山口**	1	3				萩原	1		
	田川	1	3	**内野**	1	1				松山＊平戸	1		
	赤石	1	0	**山内**	2	2				牧山	1		
	黒川	1	3	永谷	1	0				山野	1		
	横岩	2	1	松口	1	1				松田	3		
				橋本	2	4				**永井＊黒島**	1		
				永田	1	3				**今村＊外海**	6		
				市瀬	1	5				**川原＊外海**	1		
				岡	1	1				木下	1		
	合計	13	16		18	30		1	0				31
荻田				**橋本**	1	1	横山(平)	1	0	**池田＊黒五**	1	畑原	2
				岩田	1	0	木村(平)	1	1	尾崎	1	**古川＊外海**	1
				末吉	1	4	谷山(平)	1	1	**尾下＊外海**	3	福井	1
										島田＊外海	2	松永	1
										田川＊外海	4	**山口＊外黒**	1
										堤＊外海	2	**山崎＊外海**	3
										中田	1	米倉	1
										西村＊五島	1		
		0	0		3	5		3	2				25

注：浜崎勇『瀬戸の十字架』16-21 頁の表の信徒名と『永遠の潮騒―田平カトリック教会創設 100 周年』204-221 頁の信徒名簿から作成した。
：現在の田平教会の地区別世帯表に基づくため、地区外の世帯を含む地区がある。
：前田家は、明治初期に小川家とともに入植・還流した世帯と思われる。
：太字は居住地区外に住む同姓世帯のある移住世帯と他地区に居住する同姓世帯を指す。

出身は 6 世帯が 6 世帯（移住地区 3 世帯・地区外 3 世帯）である。すなわち、外海地区・黒島地区ともに平均 1.3,4 世帯の分家を創出する一方で、五島地区・平戸地区の世帯数は増加が見られない。

また、昭和初期までに移住した世帯の同じ地区内における増減と他の地区から各地区への分家等の創出は、横立地区の場合、初期の世帯の増減は 7 世帯が 12 世帯（外海出身 4 世帯→10 世帯・黒島出身 3 世帯→ 2 世帯）、江里山地区の場合、 8 世帯が 11 世帯（外海出身 8 世帯→11 世帯）、牟田・瀬戸山・五島ヶ原地区の場合、34 世帯が 68 世帯（外海出身 27 世帯→51 世帯・黒島出身 5 世帯→16 世帯・五島出身 2 世帯→ 1 世帯）、外目・以善・万場・下寺地区の場合、32 世帯が 46 世帯（外海出身 13 世帯→16 世帯・黒島出身 18 世帯→30 世帯・平戸出身 1 世帯→ 0 世帯）、荻田地区の場合、 6 世帯が 7 世帯（黒島出身 3 世帯→ 5 世帯・平戸出身 3 世帯→ 2 世帯）である。

すなわち、最も古い移住地の横立地区・江里山地区は合せて 15 世帯が 23 世帯に増加し、外海出身の世帯が増加する。牟田・瀬戸山・五島ヶ原地区も倍増し、外海・黒島出身の世帯が増加する。外目・以善・万場・下寺地区も増加し、外海出身・黒島出身の世帯が増加する。荻田地区は黒島出身の世帯が増加する。

さらに、居住する地区外の田平地区（小教区）に分家等を創出した世帯は、横立地区に分家等を創出したのが 10 世帯（外海出身 5 ・黒島出身 3 ・五島出身 1 ・不明 1 ）、江里山地区に分家等を創出したのが 2 世帯（黒島地区出身 1 ・不明 1 ）、牟田・瀬戸山・五島ヶ原地区 9 世帯（外海出身 5 ・黒島出身 2 ・不明 2 ）、外目・以善・万場・下寺地区 13 世帯（外海出身 12・黒島出身 1 ）、荻田地区 18 世帯（外海出身 15 世帯・五島出身 1 ・不明 2 ）である。

すなわち、田平地区（小教区）の各集落に定着した後、その集落だけでなく他の集落で分家を創出していく。とりわけ外目・以善・万場・下寺地区や移住の遅かった荻田地区が目立つ。外目・以善・万場・下寺地区のうち外目地区・下寺地区・生向地区は、横立地区・江里山地区の集落が次第に拡大していったと見られている（長崎県世界遺産「構成資産等基礎調査」地域・地区報告書・平戸地域Ⅳ 55 頁）。

なお、「近隣はみな信徒ばかり」の外海・黒島・五島出身の世帯にとって、田平地区は「近隣は異教徒ばかり」（浜崎 30 頁）という記述から、田平地区は信徒と信徒外が同じ地区（集落）内に共存する状況だったことが分かる。移住当時、「食糧の買い出しに行っても、米一升分けてくれない所もあった。……信者の台頭するのを押さえるため、たんぼだけは絶対に信者には売らないという申し合わせ」（浜崎 30 頁）の集落もあったという。

3. 田平地区における宗教コミュニティの形成

田平地区への集団移住は黒島教会のラゲ神父・出津教会のド・ロ神父が主導しているため、宗教コミュニティの形成が組み込まれた計画と見るのが妥当であろう。とはいえ、信仰の制度化といえる仮聖堂の設立には、草分けの移住から 13 年かかっている[4]。

聖堂設立まで

横立地区への開拓移住の当初、黒島出身の永井土井蔵宅が民家御堂となる。その 2 年後、外海地区（出津）からの第 2 次開拓移住団に、出津時代にド・ロ神父の命で長崎市で信仰教育を受けていた今村庄衛門が参加する。今村の田平移住はド・ロ神父の使命で、司祭不在の田平地区で教え方を担当するためであった。今村の移住後は、今村宅を民家御堂にして主日の務めと信仰指導が行なわれる（浜崎 23 頁）。

移住世帯がしだいに増加するにつれて、その後、各地区に信仰の拠点が形成されていく。瀬戸山地区では、吉村兵蔵の自宅が民家御堂になる[5]。この民家御堂も増加する信徒をすぐに収容しきれなくなったものの、吉村が死去した時にその家を購入して、1899（明治 32）年、最初の仮聖堂にする。

その後も移住世帯の増加と分家の創出が続き、この仮聖堂も信徒を収容しきれなくなり、 4 年後の（明治 36）年に仮聖堂を増築する。増築の資金の一部は、出津教会のド・ロ神父の助手の伝道師中村近蔵の寄附（50 円）という（浜崎 23-25 頁）。

信仰教育と司祭の着任

江里山地区で自宅を民家御堂とし、信仰教育に携わった今村は以善地区に移転し、外目・以善・万場方面の教え方となる。また女性と子どもの信仰教育は、当初、黒島から2人の女性が田平地区の女性・子供の教え方として出張していたが、明治21年にド・ロ神父の命を受けた川崎ソネが出津から移住し、正式に女性・子どもの教え方を担当する（浜崎25頁・100頁）。

開拓移住後の田平地区は紐差教会の司祭の巡回地で、巡回は小舟で行なわれ、漕ぎ手と呼ばれる信徒が交代で司祭を送迎した（浜崎26頁）。しかし田平への移住世帯の信徒数がさらに増加し、1905（明治38）年、仮聖堂を持った田平地区に紐差教会の助任司祭の片岡神父が常駐する（浜崎36頁）。1914（大正3）年に、田平地区は小教区として独立し、初代主任司祭として中田神父が着任する。

聖堂の設立の動き

明治後期の片岡師の着任後も、移住世帯と分家の創出によって信徒世帯数は増加を続け、増築した仮聖堂の堂外にも信徒があふれる状況の中で、教会の建設を決定する。1917（大正6）年に長崎県知事に提出した教会設立の趣意書（「天主堂設立願」）に「……漸次信徒増加し現今にては其数壱千に垂らんとするに至り新たな天主堂を建立するの必要を来らせり　天主堂の建築費は南田平村及田平村の信徒が数十年来堂宇建設の目的を持って蓄積したる貯金並に内外宣教師及他所信徒の寄附金を持って之を支弁す」（浜崎47頁）とある。この文面から、建堂の希望が数十年にわたるもの、つまり田平地区への移住以来の悲願であることが読み取れよう。また、内外宣教師と他地区の信徒の寄付への言及から、教会設立の直接の契機が紐差教会主任司祭のマタラ神父による友人の遺産の一部（4千円）の提供と見ることができる（浜崎40頁）。

聖堂建設の資金

入植から30年後が経過し信徒数が千人に近づき、中田司祭が着任した1914（大正3）年に聖堂建築費の積立額は2千円となる。教会建設に向けた司祭と信徒の協議の中で、日曜日の労働に課される日労金の額（農業者は年間1円・漁業者はその日の収入の半額）と毎月の積立額（各世帯5銭）が決定される（浜崎38頁）。こうした金額にマタラ神父の寄付が加わるものの、それでも建設費が不足するため、「長崎、五島、紐差方面の先輩・知人の間を駆け回って資金を調達した」という（浜崎56頁）。

さらに、教会建設後の関連工事・整備の一部は、漁業に腕利きの田平の信徒に目をつけた大島村のボラ漁の網元から信徒の日曜労働の対価（いわば日労金）としての支援金である（浜崎56頁）。

聖堂の建築

教会の建設は、鉄川与助が率いる鉄川組と信徒の労働提供によって担われた。まず1915（大正4年末）に敷地整備が始まる。その際、信徒6人が生き埋めになって、2人が亡くなっている。翌年の春に石材・レンガ・砂・セメント等の建築資材が船で届き、浜から信徒が人力で搬入し、鉄川組の建設作業にも多くの信徒が労働奉仕する。

こうした金銭・労働の負担によって、1917（大正6）年末、長崎市の中町教会（1896年）・浦上教会（1914年）につぐ長崎教区3番目の赤レンガの大聖堂が完成し、移住から約30年後の1918（大正7）年に、田平教会の献堂式を迎える（浜崎49頁）。経費は材料費・工賃・海上輸送費・祭壇の費用の合計で2万円である。また仮聖堂は信徒会館・公共要理の勉強室・教会売店に転用する（永遠の潮騒156頁・337頁）。

田平教会

新たな教会―下寺教会―の設立

田平教会の設立の約40年後（1956年）、下寺免

表 3.1　田平小教区の信徒組織（役職）　表 3. 田平教会の役職者（宿老・教会財政顧問・経済評議委員 9

	中田初期（3人）			中田中期（5人＋2人）				中田後期（5人）			熊谷期（1940年代後半～60年代前半）	今村・野原期（1960年代前半～70年代前半）	竹山期（1970年代前半～80年代前半）	大山期（1980年代前半～）
	名前	居住地	出身地	名前	居住地	出身地	名前	居住地	出身地					
宿老	出口荒八	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	外海(出津)	竹元弥重	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	黒島	田口幸三	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	第二世代・黒島か？		山口清太郎	友永義光	堤幸太郎	浜崎　勇
	堤　幸蔵	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	外海(黒崎)	山口藤八	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	黒島	友永助太郎	外目・以善・万場・下寺	黒島		田口幸三	田川音吉	浜崎　勇	浜元順良
	浅田万吉	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	黒島	溝口郡平	外目・以善・万場・下寺	黒島	末吉兼太郎				山口元次郎	堤幸太郎	田川　進	松下鹿三郎
				山内喜八	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	黒島	出口浅次郎	荻田	第2世代・外海(出津)？		今村清松	浜崎　勇	浜崎　敏	山内忠七
				出口新衛門	外目・以善・万場・下寺	第2世代・外海(出津)？	池田大吉	外目・以善・万場・下寺	第二世代・黒島か？		大木友一		山内忠七	
宿老（地区割）	瀬戸平吉	永久保	五島	池田長八	永久保	平戸					永谷茂			
				川脇与吉	岳崎	五島か？								

注：『永遠の潮騒―田平カトリック教会創立100周年―』（311頁）の記載に浜崎勇『瀬戸の十字架』（16-21頁）のデータを加えて作成した。

に新たな教会が設立される（川上38頁）。この教会は後述のむつみ保育園の施設を利用したものである。

信徒組織

田平教会（小教区）の主な役職は、教会の顧問の宿老と評議員である。中田司祭の時期の宿老は司祭の指名制で、表3.1のように、初期は本教会3人、永久保地区1人の4人体制である。このうち本教会の宿老は、牟田・瀬戸山・五島ヶ原地区に居住の信徒で、外海（出津・黒崎）と黒島出身である。また永久保地区の宿老は、五島出身者と推定される信徒である。

さらに信徒数が増加した中期には、宿老は本教会5人、永久保地区1人・岳崎地区1人の7人に増員する。本教会の宿老は、牟田・瀬戸山・五島ヶ原地区に居住の信徒3人（いずれも黒島出身）、外目・以善・万場・下寺地区居住の信徒2人（黒島出身の信徒・外海の出津出身の第2世代と推定）である。また永久保地区の宿老は平戸出身者、岳崎地区の宿老は五島出身者（推定）である。

さらに、後期は5人体制となる。牟田・瀬戸山・五島ヶ原地区に居住の信徒1人（第2世代・黒島出身と推定）、外目・以善・万場・下寺地区居住の信徒2人（黒島出身・第2世代黒島出身と推定）、荻田地区居住の信徒1人（外海の出津出身の第2世代と推定）、不明1人である。なお1940（昭和14）年に永久保地区・岳崎地区に教会が設立され、両地区は田平教会から分離する。

また、中田司祭の時代には、主任司祭の任命する宿老の下に各集落2名ずつの評議員を置き、宿老と評議員で役員会を構成している（浜崎130頁）。しばらく後の数字であるものの、信徒組織の下部単位である組（集落）の数は22に及ぶため、相当数と思われる（浜崎88頁）。

中田司祭の後の熊谷司祭の時期は、1960（昭和35）年に平戸口教会が小教区として独立し、宿老は田平地区（小教区）の南部・北部各2名の4名体制となり、その選出は選挙制に移行する。その後、宿老の任期は4年から2年に短縮するとともに、評議員も各地区の選出となる（浜口129頁）。

1980年以降の信徒組織は、経済評議会・使徒職委員会の下で、機能別の諸委員会の教会整理委員

表 3.2　田平の各地区の教え方担当者

区分	地区	名前	居住地区	出身地	世代	第 1 世代の居住地区等
本教会	牟田	浜崎竹造	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	外海(出津)	第 1 世代	
	五瀬	川原幸之重	牟田・瀬戸山・五島ヶ原	外海(出津)	第 1 世代	その後、移転
	外目・以善・万場	今村庄衛門	江里山	外海(出津)	第 1 世代	移住時、他に小川音作も担当
		浜崎仙衛門		外海(出津)推定	第 2 世代(推定)	牟田・瀬戸山・五島ヶ原
	横立・江里山	山口善作	横立	外海(出津)推定	第 2 世代(推定)	
		今村喜八	横立あるいは江里山？	外海(出津)推定	第 2 世代(推定)	横立あるいは江里山？
	青年	山口清太郎	横立あるいは牟田・瀬戸山・五島ヶ原		第 2 世代(推定)	横立あるいは牟田・瀬戸山・五島ヶ原
		山口藤光	横立あるいは牟田・瀬戸山・五島ヶ原		第 2 世代(推定)	横立あるいは牟田・瀬戸山・五島ヶ原
		瀬崎豊		推定	第 2 世代(推定)	横立
	婦人(北部)	川崎ソネ	江里山	外海(出津)	第 1 世代	ド・ロ神父の命で兄川崎源一家とともに移住
	婦人(南部)	久松キヤ	田平修道院	外海	第 2 世代	両親とともに以善に移住
永久保	永久保	松山喜衛門	永久保・野田	平戸(宝亀)		
	青年	濱道政太郎				1986 年坊田に濱道姓
	子供	浜道ミノ				1986 年坊田に濱道姓あり。最初が浜道・次に池田・大木が担当。
		池田ユリ	永久保・野田	平戸	第 2 世代(推定)	
		大木キクエ				
	婦人	池田シノ	永久保・野田	平戸	第 2 世代(推定)	
荻田	荻田	出口朝次郎(宿老兼務)	荻田	出津推定	第 2 世代(推定)	
岳崎	岳崎	山田五郎八	岳崎	五島推定	第 2 世代(推定)	
		池田久助				
		大谷藤助				
	子供	山添マセ				
		池田サヤ				
福崎	福崎	浜道喜代太(宿老兼務)				
	子供	島向ルイ				

注：『永遠の潮騒―田平カトリック教会創立 100 周年―』(311 頁）の記載に基づいて作成した。

会・編集委員会（教会報の発行）・典礼委員会・高校生会・建設委員会・墓地管理委員会・墓地整理委員会と性別・年齢別の単位の木よう会（既婚男性が会員資格）・婦人会・青年会・育成会（中学生以下の育成）が存在し、議決機関として信徒総会が開催されている。他に在世フランシスコ会、高山右近の列福を祈る会、YBU 心のともしび後援会、育英会、ウルトレア、わかば会（高齢者の健康保持)、レジオ・マリエが活動している（永遠の潮騒 359 頁)。

信徒教育

中田司祭の時期の信仰教育（公教要理）は、主として信徒が担当している。要理担当の信徒は教え方と呼ばれていたが、田平地区の場合、表 3.2 のように、地区別に 8 地区で実施されている。信徒教育の単位は、教会近辺の牟田地区・五瀬地区・外目以善万場地区・横立江里山地区と荻田地区、そして教会から離れている永久保地区・岳崎地区・福崎区である。他に本教会・永久保地区には年齢（青年）・性別（婦人）の教育担当がいる。信徒教育の回数に関して、約 30 年後の時期であるものの、児童に対し

て年間300回実施という記録がある（浜崎71頁）。

1886（明治19）年の最初の移住時、男性の信徒教育は今村庄衛門と小川音作が担当している。ド・ロ神父に田平地区に教え方として行くように命じられた今村とともに教え方を担当した小川（旧姓前田）は信徒の移住前から田平地区に居住し、神学校にも通い要理に通じた信徒であった。信徒の開拓移住に合わせて瀬戸山の土地2町8反を同じ旧住民の4世帯で購入し、平戸島紐差地区から来住する（浜崎15頁）。女性の信徒教育の初期の担当者が不在であったため、既出の黒島から出張の女性信徒2名が担当している。

中田司祭の頃の信仰教育担当者は、本教会の各地区を外海地区（出津）の第1世代および第2世代が担当している。既出の川崎ソネは、1888（明治21）年、ド・ロ神父に田平地区で教え方を担当するように命を受けて兄家族とともに28歳で移住し、その後60年間、女性・青少年・求道者・結婚の秘跡の公教要理を担当する。久松キヤは、1907（明治40）年、紐差教会のマタラ神父によって平戸島紐差地区の修道院（田崎愛苦会）に公教要理の学習のために派遣された田平地区の4人の女性信徒の1人で、1917（大正6）年の修道院の設立までは自宅から教会に通って活動し、修道会設立後に修道会員となっている。

なお、こうした信徒教育の結果、昭和期までに田平教会から20名の司祭と130名の修道士・修道女が輩出される。

修道会

マタラ神父による久松ソネら4人の派遣の後、主任司祭の中田司祭は田平地区に女部屋（修道院）設立を計画し、さらに川崎フイ・小川エキ・溝口ウメ・田川セヨを派遣する（濱崎92頁）[6]。そして小川エキの親族の寄付した住宅と農地を基に仮修道院を設立し、1917（大正6）年に中田司祭が購入した土地に聖堂建設の残材で修道院を設立する。初代の院長は田崎愛苦会（紐差修道院）の第2代・第4代院長の林スエで、1920年に川崎フイが第2代目の院長になる（永遠の潮騒337頁）。

寄贈された畑の売却金で新たな農地を購入したり看取りの条件で土地を寄贈されたりして、修道院は信仰教育等とともに農業等の生産活動に携わる。主なものは、農産物の生産や自家製の生糸による羽二重の機織り、飼育した綿羊からの羊毛とり、さらに第二次世界大戦後は養鶏で最盛時に2千羽飼育している。また農業以外では、ソーメン製造である。出津出身の川崎フイの両親にド・ロ様素麺の製造の知識があり、試作・研究したものと見られる（浜崎94頁）。第二次世界大戦後には、精米・製粉事業および売店の経営に携わる。

加えて、助産と保育事業を担当する。助産は中田司祭が修道会員の一人に長崎で助産術を学ばせて、信徒・非信徒に対する修道会の活動に加えている。保育も中田司祭が修道会員の一人を東京の保母専修学校に通わせて、1935（昭和10）年に社会館で保育事業を開始する。その後も保母養成と助産婦養成の目的で、3人を平戸高女に通学させている。第二次世界大戦後は、下寺・以善地区の要望に対応してむつみ保育園を開設し、西木場地区で曙保育園、福崎地区で愛児園を開設する（浜崎97頁）。

社会館・育英会

北松地区のいくつかの小教区の福祉・地域活動の拠点である社会館は、田平小教区で最初に設立されたものである[7]。まず中田司祭は、1935（昭和10）年に長崎教区司教の応援を得て、平戸口地区に平戸口社会館を設立し、修道会による保育事業を開始する。当時の社会館の保育と助産以外の活動は不明であるものの、平戸口社会館をモデルとした他教会の社会館の活動が多岐にわたるため、他の事業も推測される。

また、田平小教区では、1962年に教会内に育英組織を設立し、奨学金制度を開始する。この奨学金制度は、長崎市の神学校に一時在籍し、その後、聖マリアンナ医科大学を創設した医師が、田平地区における進学の事情を知り、高校進学者を対象に提供

平戸口社会館跡地

したもので、多くの高校生が利用する（浜口 138-139 頁）。

墓地

田平地区における最初の受洗者の吉村兵蔵が洗礼の 2 ヶ月後に死去したため、近隣の信徒数人が土地を提供し合って共同墓地を造成し埋葬する。さらにこの隣接地が買い取られて、教会の正式墓地なる。横立・江里山・永久保・岳崎にも共同墓地、外目に個人墓地が造成される。中田司祭の時に教会に隣接する墓地が要望され、1919 年に現在の 1 号墓地、さらに 1921（大正 10）年に 2 号墓地が造成される（浜口 24 頁・59-60 頁）[8]。

4. 宗教コミュニティの展開と常態的な他出

明治中期の草分けの移住後、来住世帯の継続と居住世帯の分家創出によって、田平地区（旧田平町）の信徒数・世帯数は急増する。こうした状況の中で信徒の動向は、第一に、田平地区における新しい教会の設立として展開する。第二に、カトリック信徒の地域社会における評価と勢力の獲得として現れ

表 4.1　田平地区の信徒数

教会名	1928 年	教会名	1937 年	教会名	1968 年	1975 年	1976 年		2010 年	
	昭和 3 年		昭和 12 年		昭和 43 年	昭和 50 年	信徒数	世帯数	信徒数	世帯数
田平教会	2518	田平教会（西木場・江迎・永久保・岳崎・福崎を含む）	2435	平戸口	998	733	743	181	766	226
				(南)田平	1308	1044	1031	210	726	220
				西木場	837	821	831	191	621	201
				合計	3143	2598	2605	582	2113	647
		転入数	-	平戸口	-	18（11）	-	-	9（2）	-
				(南)田平	21（18）	12（10）	-	-	3（3）	-
				西木場	3	25（22）	-	-	8（3）	-
				合計	24（18）	55（43）	-	-	20（8）	-
		転出数	43	平戸口	23（21）	24（14）	-	-	9（1）	-
				(南)田平	76（68）	27（26）	-	-	3（2）	-
				西木場	11（11）	16（11）	-	-	2（1）	-
				合計	110(100)	67（51）	-	-	14（4）	-

注：『旅する教会―長崎邦人司教区創設 50 周年史』（カトリック長崎大司教区、1977 年）およびカトリック長崎大司教区『集計表』を基に作成した。
：（　）の数値は長崎教区外に住む信徒である。

表 4.2　田平町の人口・世帯数の変化

		年	1889 年	1912 年	1920 年	1926 年	1928 年	1935 年	1941 年	1947 年
			明治 22 年	大正 1 年	大正 9 年	昭和元年	昭和 3 年	昭和 10 年	昭和 16 年	昭和 22 年
田平町	南田平村	人口	-	5287	5354	-	5840	6201	-	7425
		世帯数	792	864	985	-	975	1114	-	1379
	田平村	人口	1760	2117	2102	-	-	2228	-	3035
		世帯数	367	366	392	-	-	410	-	540
	合計	人口	-	7404	7456	-	-	8429	-	10460
		世帯数	1159	1230	1377	-	-	1524	-	1919
田平教会		年	明治 21 年			-		昭和 12 年	昭和16•17年	昭和 21 年
		信徒数	-	-	-	-	2518	2453	2205	2659
		世帯数	17	93	105	111	-	-	232	-
信徒比率		信徒率	-	-	-	-	43.1	39.6	35.6	35.8
		世帯率	2.1	7.6	7.6	-	-	-	20.8	-
備考			＊分母：南田平	＊分母：南田平＋田平。信徒世帯数には分家等は含まれない。	＊分母：南田平＋田平。信徒世帯数には分家等は含まれない。		＊分子は西木場を含み、分母：南田平のため数値が高い。	＊分子は西木場を含まない。分母：南田平	＊分母：1935 年の南田平。なお信徒世帯数は貯蓄組合傘下世帯のみ。	＊分母：南田平＋田平

注：『田平郷土誌』（71～72 頁）に浜崎勇『瀬戸の十字架』・『永遠の潮騒―田平カトリック教会創設 100 周年』の信徒数を含めて作成した。

表 4.3　平戸口教会の信徒世帯

	姓	世帯数	居住地区（免）	瀬戸の十字架における記載			戦没者による戦前の居住確認
				有無	居住地区	出身地	
1	桃田	9	野田・山内・大久保・小手田			黒島？	小崎○
2	池田	6	山内・大久保	○	永久保・野田地区	平戸地区	○
			下亀	○	岳崎	黒島？	○
3	白石	5	大久保			上神崎？	生向・下里○
4	真浦	5	野田・山内・岳崎			五島？	○
5	赤波江	3	大久保・岳崎・里	○	岳崎	五島	○
6	浅田	3	大久保	○	永久保・野田	黒島	下寺○
7	川端	3	岳崎	△	岳崎	五島(→上神崎)？	小崎（川畑）○
8	田上	3	山内・岳崎	○	岳崎	五島	○
9	畑原	3	山内・小手田・里			黒島(→上神崎)？	西荻田・岳崎○
10	浜(濱)道	3	野田・大久保	○			福崎○
11	古川	3	大久保・山内	○	牟瀬五	出津	○
12	松山	3	大久保	○	永久保・野田	宝亀	○
13	赤石	2	大久保	○	永久保・野田	出津	○
14	上田	2	山内免				
15	川上	2	野田・山内				深月○
16	白浜(濱)	2	岳崎			五島(→上神崎)？	○
17	末吉	2	山内・大久保	○	永久保・野田	黒島	西荻田○
18	田川	2	山内	○	牟瀬五 4 外以万下 1	黒崎 5	坊田○
19	堤	2	山内・大久保	○	牟瀬五	黒崎	東荻田・生向○
20	永富	2	岳崎			五島(→上神崎)？	
21	濱口	2	野田・大久保	○	牟瀬五	黒崎	○
22	針尾	2	小手田免			黒島？	
23	平瀬	2	山内・小手田				
24	平本	2	野田	○	牟瀬五	黒崎	永久保○
25	牧野	2	大久保	○	永久保・野田	(黒島→)上神崎	
26	牧山	2	山内免				生向・上里○
27	森川	2	大久保・岳崎	○	岳崎	五島	
28	山口	2	山内	○	横立・牟瀬五・外以万下	出津・黒島	○
29	有馬	1	小手田				
30	井添	1	大久保				
31	内野	1	里	○	外以万下	黒島(→上神崎)？	小崎・万場○
32	梅田	1	山内			黒島・平戸	
33	大石	1	大久保	○	江里山	出津	釜田○
34	大木	1	山内	○	岳崎	五島	永久保○
35	大谷	1	岳崎	○	岳崎		
36	樫山	1	大久保	○	永久保・野田	黒島	永久保○
37	烏山	1	山内				
38	川口	1	鹿町				上亀○
39	川田	1	山内				
40	川脇	1	岳崎			(五島→)上神崎	
41	木村	1	野田	○	荻田	宝亀	東荻田○
42	小出	1	山内				
43	坂本	1	山内				坊田・小手田・万場○

44	佐々木	1	野田	○	永久保・野田	宝亀	
45	佐藤	1	野田				
46	杉山	1	山内				
47	瀬崎	1	山内	○	横立	黒島	
48	瀧下	1	大久保				
49	竹崎	1	野田				
50	種田	1	里				
51	中尾	1	山内				
52	中村	1	山内				下寺・上亀・深月○
53	橋本	1	山内			黒島(→上神崎)？	野田・坊田・南荻田・下寺○
54	浜上	1	大久保			五島(→上神崎)？	永久保○
55	浜崎	1	下亀	○	牟瀬五・外以万下	出津	
56	原塚	1	大久保				
57	久志	1	岳崎				
58	藤沢	1	野田				
59	干野	1	里				
60	本田	1	山内				
61	松下	1	大久保	○	永久保・野田	三重	下寺○
62	松田	1	山内				下寺・東荻田・南荻田・釜田・小手田・小崎・下亀○
63	山浦	1	大久保				
64	山崎	1	山内				小手田・深月・米内○
65	山添	1	野田	○	岳崎	五島推定	福崎○
66	山見	1	山内				
67	山本	1	里			五島あるいは黒島(→上神崎)	野田○
68	横尾	1	山内				
69	横山	1	岳崎	○	荻田	宝亀	
70	吉川	1	小手田				
71	吉野	1	大久保				

注：平戸口教会の信徒の名前と世帯数は『平戸口教会史―献堂 50 周年記念―』(90-107 頁）の記載に浜崎勇『瀬戸の十字架』(16-21 頁）の記載を組み合わせて作成した。
：牟瀬五は牟田・瀬戸山・五島ヶ原の略、外以万下は外目・以善・万場・下寺の略である。

る。第三に、その一方で、早期から信徒世帯・信徒の他出が常態化する。

昭和期における信徒数の増加

田平地区への移住の信徒数・世帯数は、最初の移住から約 10 年後に 50 世帯、大正元年に 90 世帯、昭和元年に 110 世帯、さらに 1941 年には 230 世帯を超え、信徒数も大正期の長崎県知事への教会設立の趣意書に 1000 人に近いと記されている。

表 4.1 は、昭和期以降の信徒数・世帯数の推移である。1928（昭和 3 ）年と 1937（昭和 12）年は江迎地区が含まれているものの、いずれの時期も 2 千人を超え、さらに第二次世界大戦後の田平 3 地区（西木場を含む）の信徒数の合計は 3 千人に達する。

また表 4.2 で、田平地区に占める信徒世帯の比率を示せば、初期の比率は 2.1%にとどまるものの、その後の比率は移住世帯数のみで 7.6%に上昇し、昭和 16 年度は田平教会のうち南田平教会国民貯蓄組合への加入世帯数は昭和 10 年の南田平村の 2 割に達する。信徒数の比率は、さらに昭和期に南田平村および南田平村・田平村の人口の 3 分の 1 に及ぶ。

周辺地区・近接地区への居住の広がり

こうした信徒数・世帯数の急増は、田平地区（小

教区）内の半島の外目地区等における分家等の創出等として顕現するとともに、大正・昭和期以降の田平地区（小教区）の周辺地区・近接地区への田平地区外からの来住と田平地区（小教区）に居住する家族の分家の創出として現われたと推測される。

周辺地区のうち平戸口小教区の状況を見ることにしたい[9]。1952年に独立するまで、野田地区・永久保地区（大久保免）・岳崎地区は、南田平教会（現在の田平教会）の小教区の所属である。平戸口小教区の信徒の多数が居住する野田地区・永久保地区・岳崎地区の昭和初期の世帯数は、表2.6のように、永久保・野田地区10世帯（平戸4世帯・黒島3世帯・外海2世帯・五島1世帯）、岳崎地区9世帯（五島9世帯）の合計19世帯である。

しかし、第2次世界大戦後の3地区の世帯数は、山内地区等を含めて約70世帯に増加し、2002年の信徒世帯（表4.3）は124世帯に達する。その内訳を推計すれば、すでに昭和初期に居住していた家族16家族（35世帯）、田平地区（小教区）の家族の分家7家族（13世帯）、大正末期・昭和初期以降に移住した家族48家族（76世帯）と推定される。平戸口小教区の世帯状況から、移住の経年化によって田平地区（小教区）の居住が飽和し周辺地区が来住世帯の受け皿になったこと、周辺地区に居住する家族に分家が創出されたこと、さらに田平地区（小教区）の家族の分家（11・18・19・21・24・32・47）が周辺地区に創出されたことで、世帯数が増加したと推測される。田平地区（旧田平町）の福崎地区、松浦市の西木場地区も平戸口小教区の状況と同様と想像される。

新たな教会の設立

―西木場教会・岳崎教会・平戸口教会・福崎教会―

こうした信徒の居住地の広がりと周辺・近接地区

西木場教会

永久保地区

岳崎地区

の信徒数の増大によって、昭和期に田平地区（旧田平町）内外に教会が設立されていく。

1936（昭和11）年に、旧田平村の福崎・小崎を含む西木場地区に西木場教会（松浦市御厨町米ノ山免）が設立される。表3.2で、中田司祭の時期に福崎地区担当の教え方が存在していたことから、この時期の信徒の居住は明らかで、浜崎の作成した移住者の子孫分布図で福崎・小崎の両地区で約30の信徒世帯が確認できる（外海町史598頁）。

さらに福崎・小崎の東側の西木場（西田）地区にも、信徒世帯が移住するようになる。『御厨今昔』（1972年）に「明治39年（1906）に平戸、五島、黒島地方よりカトリック信者15戸が西木場に移住し、初崎の開拓に従事したのが本町に於けるキリスト教の始めである。以来信者の数も居住地域も広がり、終戦後の昭和20年代には、礼拝堂が西木場、御厨浦の2個所に建立さるゝようになった」（瀧山110頁）とある。旧田平村の2地区に接する旧御厨村西田免の半島の波津（初）崎への入植が契機になって移住世帯が増加したため、1936（昭和11）年、民家を改造した西木場教会が巡回教会として設立される。

第二次世界大戦後、さらに信徒数が急激したため、西木場地区を担当したオーストラリア出身のコロンバン会の司祭の20万円の寄付を契機に教会設立の機運が生じ、1949（昭和24）年に西木場教会

平戸口教会

の聖堂と司祭館が総工費 280 万円で建設される（浜崎 50 頁）。同年に、西木場教会は小教区として独立する。

1940（昭和 15）年、岳崎地区・永久保地区それぞれに巡回教会が設立される。このうち永久保教会は、1945 年に焼失する。第二次世界大戦後に中田司祭が平戸口社会館に引退して、その二階でミサをあげるようになり、田平教会から距離のある永久保・岳崎の信徒が参加する。中田司祭の転出後はコロンバン会の司祭がミサを担当し、離任時に聖堂建設のための資金 30 万円を寄付し、信徒の間に聖堂建設の機運が生じる。

中田司祭が社会館横に購入していた土地に永久保・岳崎の信徒が労働奉仕をして、1952（昭和 27）年に平戸口教会が完成する。司祭館を含めた総工費は 370 万円である（浜崎 151 頁）。同年に、平戸口教会は小教区として独立する。

福崎地区では、平戸口社会館における保育事業の後に次々設立された保育園・愛児園のうち福崎愛児園が 1973（昭和 48）年に閉園となり、その建物を利用して福崎教会が設立される。なお、昭和 30 年代（1958 年）に旧新御厨町に御厨教会が設立される。

地域における評価と勢力の保持

田平地区（小教区）への定着と信徒・世帯の増大とともに、田平地区で教会の存在感が増していく。1947（昭和 22）年に就任した熊谷司祭以降、南田平村および田平町において教育委員に田平教会の主任司祭が就任する。

また、表 4.2 の大正・昭和期に南田平村における信徒比率の上昇を反映して、地域社会において信徒が一定の勢力となっていく。信徒の中から村会議員・町会議員が生まれるようになり、大正期の南田平村議会には牟田・瀬戸山・五島ヶ原（生向）の川原幸之重、大正末から昭和初期の議会（定員 18 名）に以善の永谷冶兵衛・野田の麦田常太郎が当選する。第二次世界大戦後の最初の選挙（定員 22 名）では、大石粂吉・瀬崎豊・今村清と永久保の池田新松が当選する（浜崎 125 頁）。

田平地区外への他出

こうした地域社会への定着の一方で、実は、明治中期の移住の直後から他出が頻繁に生じている。小川音作・吉村兵蔵・前田芳五郎・古川常次郎・木村は、黒島・外海からの開拓移住に合わせて移住したものの、早々に木村家、その後に第二世代以降の吉村家（地区内の横立に移住の後に江迎に移住）・小川家（江迎に移住）・古川家が他出する（浜崎 15 頁・23-25 頁）。実際、1919（大正 8 ）年に拡張された墓地に、「墓標がなく、誰も世話をしていない墓が 400 基近くあります」（永遠の潮騒 361 頁）という記載から挙家離村の多さがうかがえる。

しかし、他出の 4 世帯のうち吉村家・古川家の同姓の世帯が田平地区（小教区）に存在しているため、子供世帯の中で定住と他出が同時発生したと見るのが妥当であろう。こうしたケースは、外海（出津）から移住し今日も田平地区（小教区）に居住する浜崎家でも見られ、田平移住の直後に浜崎八百蔵が北海道の広島村に移住している（永遠の潮騒 73 頁）。また『瀬戸の十字架』に掲載されていない梅田藤平家の事例は、藤平の世代内で黒島内の白馬―東堂平を移動し、その後に平戸（大垣）を経由して田平地区に来住し、田平地区内の馬の元―大久保等 3 ヶ所を移動した後に他出し、現在の佐世保市褥崎地区の赤島―朝地露に定着したものである（褥崎 128 年別冊付録 13 頁）。しかし、田平地区（小教区）に梅田姓の世帯が存在することから、田平地区（小教区）に残留した世帯の可能性がある。

つまり、田平地区（小教区）では、表 2.10 で明らかになった他出を上回る世帯の来住と居住世帯における多数の分家の創出、初期からの常態的な世帯

表 4.4　能古島大泊地区への移住

移住の時期	世帯番号	世帯主 世帯名	信徒世帯	出身地	備　　考	生産の状況および備考
大正期	1	猪ノ山溝次	-	熊本県	1915 年、①放牧牛の世話。その後、果樹園の管理。	
	2	結城政吉	-	姪浜	①漁業・②明治後期に最初に移住、浜に家を構える。	
	3	上村恵吉	-	-	さらに昭和初期にも入植する。	
	4	辻山新済	△	-	国有林の管理人。妻がカトリック。さらに昭和初期に入植。	
	他に、5 鶴森喜蔵家・6 甲斐家・7 浜里家・8 岩川作太郎家・9 窪田信蔵家					
昭和初期の開拓移住期（開墾移住）	10	永田政衛	○	御厨（西木場）	永田家の長男の世帯	①サトイモ・たばこ・ゆり・綿・大根・陸稲・マホラン・大根種が栽培される。②開拓移住者として関さんという世帯の紹介がある。この時期の世帯数は 36 世帯程度である。
	11	永田房一	○	御厨（西木場）	永田家の二男の世帯	
	12	西方政次郎	○	御厨（西木場）	永田家の三男の世帯。西方善三郎家の養子となる。昭和 24 年に市有地の払い下げ。	
	13	西方善三郎	-	-	政次郎の養家	
	14	安井庄司	-	-	その後に他出。永田才松が安い宅を買い取って寄付教会とする。	
	15	山内源太郎	○	田平	息子は山内義元	
	他に、16 上村伴蔵家・17 山下松吉家・18 田中七三郎家・19 橋本松太郎家・20 二ノ宮安三郎・21 前田次郎吉・22 松尾サイチ家・23 大森留吉家・24 吉岡覺太郎家・25 高田ツル家・26 庄島仁一郎家・27 黒井家・28 西田家・29 山木喜作家・30 久保房太郎家					
第二次世界大戦後（昭和 24 年の市有地払い下げ）	31	牧山誠	○	馬渡島		①さつまいも・ばれいしょ・麦・菜種・サトウキビ・つくね芋が栽培される。その後、甘夏柑・ニューサマー・八朔・伊予かんが栽培される。和牛・乳牛の肥育・養豚が行われる。
	32	牧山ミエ	○	馬渡島	ミエは、房一の娘。	
	33	山内義元	○	-		
	34	浜崎辰次	○	馬渡島	子供一人で住む。本家が崩れかける。	
	35	牧山真一	○	馬渡島	馬渡島からブラジル。ブラジルから戻りしばらく住む。	
	他に、36 岩政万太郎・37 高畠又市・38 無津呂房雄・39 小川武次					
	40	本郷	○	馬渡島		聞き取り調査による追加事項。
	41	木村	○	馬渡島	昭和 30 年頃	
平成	42	下田	○	五島	渡船の機関長となって移住。	

注：高田茂廣『能古島の歴史』（1985 年）の記載を基に作成した。備考の①は『能古島の暦』、②は『旧能古村関係資料』（著者・発行年不詳）の記載を掲載している。
：4 の備考および 10 以下の出身地は永田夫妻への聞き取りに基づく。

の他出の三つの状況が同時進行していたといえよう。この周辺・近接地区を含めた常態的な他出には、居住の経年化とともに生じる農業規模の縮小傾向や小作、半島等の生産条件の不利性さらに漁業等への依存（兼業）に伴う身体的・経済的なリスク、が関係したと推測される。

第 4 次移住地への他出―能古島大泊地区―

田平地区からの常態的な他出には、周辺・近接地区からの挙家離村も含まれる。こうした第 4 次移住地の一つが、福岡市西区能古島大泊地区である。

能古島大泊地区

大泊地区への居住は、表 4.4 のように、1915（大正 4 ）年が最初である。熊本県人の猪ノ山は大泊で、最初は放牧牛の世話、次に果樹園の管理人に転じる。その時期に対岸の現福岡市西区姪浜の漁師も移住し、1926（大正 15・昭和 1 ）年頃に 9 世帯に増加する。聞き取りによれば、この時期に移住した 7 の辻山新済の妻がカトリック信徒である(10)。

さらに、1929（昭和 4 ）年に開拓地が払い下げとなったことで、入植者が増加する。この時の開拓地の総面積は 50 町歩で、一戸平均 1 町 5 反～ 2 町 5 反である（高田 144-145 頁）。一戸あたり 2 町歩として推定した場合、25 世帯規模の入植地である。実際、1926 年当時に入植した 2 世帯を含めて 23 世帯が 1935（昭和 10）年頃までに入植する。入植当初は若い男性の先行移住で、開墾地にさつまいも・麦・栗・ぶどう・大根が栽培されている。麦の収穫時期に、一月も本村に下りなかった人もいたという（旧能古村関係資料 122-123 頁）。

能古島大泊地区での聞き取りでは、カトリック信徒世帯の移住の最初は、永田才松とその子どもの 10 永田政衛・11 永田房一・12 西方政次郎世帯である。永田才松は黒島の根谷出身で松浦市御厨地区の西木場に移住し、農業と漁業を兼業していた。一家で従事していたイワシ網漁に失敗した時期に次男の房一が「土地を無償でくれる開拓地がある」という話を聞き大泊地区に移住する。表 4.5 は、昭和初期の開墾奨励金交付に関する能古島（旧名残島）等の状況である。「残島第一耕地整理一人施行」の 1929（昭和 4 ）年入植者に対する補助支給年の 1930 年の 3 世帯は、永田家の 3 兄弟の開墾地移住奨励制度による移住を裏づける。なお、永田才松と同じ黒島の集落出身の 15 の山内源太郎も田平を経て同じ制度を利用して大泊地区に移住したと推測される。

開墾地移住奨励制度に関して、「開墾に対する国の補助金をめぐって、村と入植者が争う」（高田 145 頁）と記している。この制度には共同建造物等の補助が含まれるため、共同建造物としての教会の建設をめぐる対立と思われる。高田によれば、村の勝訴となる。そのためか、聞き取りでは「公園となった所に桜を植えることになった」という。

第二次世界大戦後の 1949（昭和 24）年にも 1 戸あたり 2 町 5 反の市有地の払い下げがあり、9 世帯が移住する。この時期の信徒の移住世帯は、馬渡島および馬渡島からブラジル移住を経た世帯である。この時期には、かんきつ類の栽培、畜産等が盛んになる。

表 4.5　開墾移住地への移住戸数

旧村名	開墾移住地	1930 年	1931 年	1932 年	1933 年	1934 年	1935 年	1936 年	1937 年
		昭和 5 年	昭和 6 年	昭和 7 年	昭和 8 年	昭和 9 年	昭和 10 年	昭和 11 年	昭和 12 年
早良郡 残島村	残島村第一耕地 整理一人施行	3	-	2	-	-	-	-	1
福岡県	国庫補助額（円）	10500	2100	3000	3000	9900	3300	1800	1800
	建築予定戸数（戸）	35	7	10	10	33	11	6	6
北松浦郡 南田平村	南田平村下寺 耕地整理組合	-	-	-	1	-	-	-	-

注：『開墾地移住二関スル調査』（第 3 輯）19-23 頁・92 頁）より作成。

能古島教会

昭和初期の世帯では、例えば10に4世帯、11に2世帯等の分家が創出され、能古島の信徒世帯は増加する。その一方で、島における農地の限定性や同区内の愛宕浜や博多区と短時間の海上交通で頻繁に結ばれ福岡市中心部に通勤可能な島嶼のため、「百姓ばするなら一人にやれ」と農地の分割を避けたい思いも強かったという。

能古島における宗教コミュニティの形成は、移住のわずか数年後の集会所（寄付教会）の設立に始まる。次男・三男とともに採石の海上運搬業に従事していた永田才松が昭和初期に他出した14の家を購入し、そのままの民家に祭壇を備えて教会（集会所）としたものである。この寄付教会に神父が来るのは年に1回で、主日は西新教会（現在福岡市早良区）のミサに行くか、教会（集会所）に集って祈っていたという。1968（昭和43）年に、現在の教会を同じ場所に建設する。貝の販売やバザー等で資金を集めるとともに信徒も建設作業を担っている。現在、12世帯、91人の信徒数である。

昭和初期、カトリック地区からの移動によって長崎県北部の炭鉱や都市で多くの教会が設立されている。その中には、大泊地区・能古島教会と同様の展開の見られる田平地区からの開拓移住地が存在すると思われる。

新しい移動―離家離村

高度経済成長期以降、田平地区（小教区）では進学や就職を理由にする離家離村が一般化したと推測される。表4.3の田平教会（南田平教会）の高度経済成長期（1968年）の1年間の転出者（信徒籍の移籍者）は76人で1308人の教会信徒の6％に及び、大半が長崎県外への転出である。表4.6は、田平地区（小教区）外に居住しているものの田平小教区に信徒籍を残している離家離村の信徒の居住地である。信徒籍を移した信徒の状況でないために正確な数値といえないものの、一定の移動傾向が明らかになる。すなわち、高度経済成長期以降、田平地区（小教区）からは大都市圏への移動が大半となり、関東（東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県）、中京

表4.6　田平地区から離家離村の他出先

都道府県	市町村	総数	男性	女性	都道府県	市町村	総数	男性	女性
愛知県 23	名古屋市	6	1	5	東京都 13	23区	9	6	3
	安城市	4	1	3		市町村	4	1	3
	刈谷市	3	3	0	神奈川県 6	川崎市	3	3	0
	豊田市	3	3	0		他市町村	3	2	1
	尾西市	2	2	0	千葉県		6	3	3
	他市町村	5	1	4	埼玉県		1	1	0
岐阜県		1	1	0	中国・四国地方		3	1	2
富山県		1	1		長崎県 32	佐世保市	12	4	8
大阪府 18	大阪市	4	2	2		長崎市	12	5	7
	東大阪市	3	3	0		小佐々町	4	2	2
	堺市	2	2	0		松浦市	3	1	2
	豊中市	2	0	2		諫早市	1	0	1
	他市町村	7	2	5	福岡県 14	福岡市	9	7	2
京都府	京都市	2	2	0		大牟田市	3	2	1
兵庫県	神戸市	2	0	2		他市町村	2	2	0
	他市町村	1	1	0	大分県		1	1	0
滋賀県		1	1	0	沖縄県		1	0	1

注：『永遠なる潮騒―田平カトリック教会創立100周年―』（204-221頁）の記載に基づいて作成した。

圏（愛知県・岐阜県）・関西圏（大阪府・兵庫県・京都府）が主な他出先になったことである。その一方で、長崎県内の佐世保市・長崎市が 2 割、福岡都市圏が 1 割と地元や近県の都市も一定比率を占めている。大都市圏への独身者の離家離村が以前の農村・炭鉱等への挙家離村に代わって、移動の中心になっている状況が明らかである。

5. 田平地区における宗教コミュニティの形成と移住

以上、長崎県平戸市田平地区（田平小教区）を事例に、第 3 次移住地の田平地区における定住状況と宗教コミュニティの展開、明治中期以降の多数の世帯の来住を可能にした地域的要因、そして常態的に発生する他出の社会的背景の把握をめざした。さらに信徒の居住地の拡大による周辺・隣接地区および第 4 次移住地への定住と宗教コミュニティ形成に関して、それを可能にした条件の把握をめざした。

田平地区における定住・宗教コミュニティの形成と他出の社会的特徴

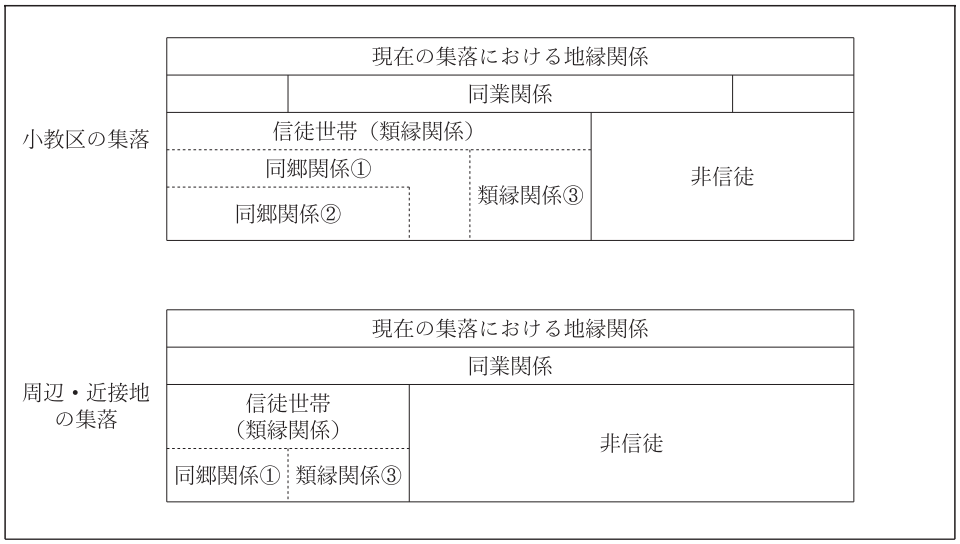
まず、田平地区における定住と他出に関する状況から、次の 4 点が判明した。

第 1 は、移住世帯が出身地別に田平地区内で集住する傾向である。移住時期の早い外海出身世帯と黒島出身世帯は、外海地区が田平地区（小教区）のうち下寺免・小手田免・以善免、黒島が田平地区（小教区）のうち下寺免・以善免・荻田免に集住する。さらに各免内でも外海・黒島内の各小教区・集落単位の集住傾向が見られる。一方、移住時期の遅い五島出身世帯と平戸出身世帯は、五島地区が岳崎免、平戸地区が永久保免・野田免と周辺地区に集住する傾向が見られる。 4 地区以外の出身世帯はさらに後発で、田平の周辺・近接地区の永久保免・野田免・岳崎免・福崎免御厨（西木場）地区に居住する傾向が見られる。

第 2 は、開拓移住が行われた明治中期における集落の存在である。信徒世帯は既存の集落の所属になるが、田平地区の集落の中には信徒世帯を敵対視し、食糧を分けてくれない集落や田の売買を禁止していた集落もあったという。また新来の移住世帯の厳しい生活状況に対する差別な対応もあったという。

この地域状況を図示したものが、図 4.1 である。田平地区の宗教コミュニティの社会的特徴を 2 点あげたい。まず第 1 の社会的状況に関して、地縁（同郷）関係が主要な社会的属性として残存したことである。地縁（同郷）関係は、副業・兼業等の生産活動を規定するばかりか、カトリック信徒の類縁（宗教）関係にも影響する。すなわち「田平教会の信者は、外海、黒島、平戸島出身の寄合世帯で、移住日なお浅く、司牧もなかなかむづかしい所だと、司祭間の中にもうわさがあった」（浜崎 39 頁）ほどであ

図 4.1　田平地区の集落状況



同郷関係①は、外海地区・黒島地区・五島地域・平戸地区等の各出身者の保持する社会関係
同郷関係②は、各地区内の同じ小教区・集落出身者の保持する社会関係
類関係縁③は、田平の他地区からの分家や後発の来住世帯

る。さらに第二次世界大戦前、五島・平戸出身者の多い岳崎免・福崎免・西木場地区における新たな教会の設立である。周辺・近接地域の教会の設立は、各地区と南田平教会（田平教会）との間の物理的距離と世帯の増加が主要な理由とはいえ、しかし結果的に同郷関係を基盤にする教会・小教区が形成されている。

第 2 の社会的状況に関して、教会（信徒）が類縁的な社会層として地域社会と関係する傾向である。具体的には、教会（司祭）が行政・文化的役割（教育委員）を担い、地域社会における主要組織という社会的認知を獲得していること、また教会の信徒規模を村町会議員数として顕在化し、一定の社会的勢力の提示する傾向である。最近の田平教会報にも平戸市議会議員への立候補に関するエッセイが掲載され、こうした傾向は今日も持続しているといえよう。

第 3 は、一定規模の営農をめざす移住である一方で、当初から生産活動に副業・兼業を組み込まざるを得なかった点である。さらに信徒・信徒外の住民の利用の増大で副業のウェイトが高まるだけでなく、明治後期・大正期・昭和期に兼業として田平地区外の網元に雇用される漁労が定着する。すなわち、田平地区における移住の継続と分家の創出を可能にしたのは、周辺・近接地区における新たな開拓地・小作地の存在とともに、副業や兼業としての漁労従事であるといえよう。

第 4 は、移住の当初からの頻繁な他出である。しかし、他出世帯と同姓の世帯の残存が多く見られ、他出のかなりが分家等であると推測される。同時に、昭和初期および第二次世界大戦後も、開拓地への集団移住と宗教共同体の形成が見られ、営農の継続と共同体形成の志向の強さが実感される。

その一方で、大正・昭和期以降には、軍港・工業都市として発展した佐世保市や北松の炭鉱への移住が増加する。一例をあげれば、炭鉱のあった加勢地区（佐世保市鹿町町）に移住した信徒世帯のうち出身地の確認できる 78 世帯の中に田平地区出身世帯が 7 世帯あり、外海地区出津（10 世帯）に次ぐ世帯数である（叶堂 2015 年 a31 頁）。さらに近年は、宗教を移動の目的にしない個人の移動が主流になる。

居住地の拡大と教会の形成

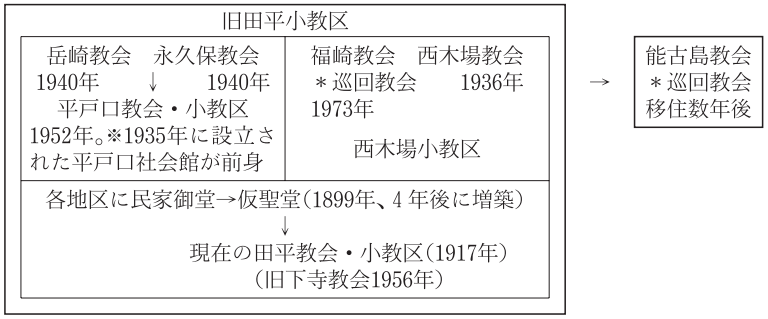
次に、信徒の居住地が拡大した周辺・隣接地区への定住と宗教コミュニティ形成の経緯から、以下の 2 点が判明した。

第 1 は、長崎のカトリック信徒の移動の主要な要因である移住地の狭小性に関して、田平地区（小教区）の場合は、移住地の狭小性が周辺地区・近接地区への居住の拡大の要因といえる点である。さらに周辺・近接地区への居住を可能にした要因として、移住先の生産条件不利性（半島地域や小作地）が指摘できる。図 2.2 のように、半島地域に関しては、その立地と地形による開拓の後発性である。一例をあげれば、野田免における国の助成による開拓農業協同組合（10 世帯）の結成は、第二次世界大戦後の時期である（長崎県農地開拓史 212 頁）。また島嶼の開拓地の福岡市西区能古島大泊地区も昭和期のである。小作地に関して、農地改革前の旧南田平村・田平村・旧御厨村では小作の比率が他町村に比べて高く、小作地の存在が平戸出身世帯等の遅い移住を可能にする。小作の多さに関しては「農地改革によって、それまで小作農に甘んぜざるを得なかった信者も、その恩恵に浴し、自作農家として立つことができる者が多くなった」（浜崎 34 頁）という記述がある。とはいえ、生産条件の不利性は、同時に常態的な他出の要因でもある。

田平地区の状況を長崎の信徒の移住史の中に位置づければ、明治中期の第 3 次移住にあたる。また移住の宗教目的のうち信仰の秘匿が不要のために、移住地の選択肢が拡大する一方で、信仰共同体形成の強い志向性の残存のために、先住の信徒世帯のいる地区の周辺で移住を志向する。

第 2 は、図 4.2 のように新たな宗教共同体（教

図 4.2　宗教コミュニティの分節と展開



会）の形成が、周辺・近接地区の分節化による点である。信徒数の増大を分節化の主要な要因に位置づけることができるものの、他の要因として、田平地区（小教区）との物理的距離、集住に関与する社会的属性として出身地の残存、田平地区（小教区）と周辺・近接地区の間の生産関係の不在、さらに地区外の支援が指摘できる。

このうち出身地に関しては、田平地区と近接地区の小教区の範域に居住する分家世帯等が、現住地を越境して出身の小教区に所属する事例から裏づけられる。また生産関係の不在とは、田平地区（小教区）の世帯と周辺・近接地区の世帯の間が網元・漁業会社―漁業従事者といった雇用関係で結びつけられていないことである。生産関係の不在は、田平地区（小教区）の中心機能を低下させ、周辺・近接地区との信仰関係の分節化を促進したと推測できる。さらに周辺・近接地区に複数の教会が設立された契機として、日本人・外国人司祭の援助関係が大きい。すなわち、比較的に短い期間の宗教関係の制度化は、信徒の規模（世帯数）と経済的能力に地区の信徒以外の支援が加わって実現できたものである。田平地区の場合、外国人司祭による積極的な支援は、ラゲ神父とド・ロ神父という外国人司祭の計画で信仰共同体が形成されたという歴史的経緯が支援につながったと見ることもできる。

田平地区における宗教コミュニティ

明治中期の田平地区への信徒の移住の特徴は、既存の複数の集落に地縁（同郷）関係に基づく定住が進んだことである。初期に移住した外海・黒島出身者の多い小手田免・下寺免の信徒の比率は、近年、集落世帯の半数弱に及ぶ。一方で、移住の遅かった岳崎地区で3分の1、他の地域は5分の1程度である。

実際、「外海、黒島、五島と言えば、近隣は皆信者ばかりと言ってよい位で、……いざ田平に来て見ると、近隣は異教徒ばかり」（浜崎30頁）という状況とはいえ、外海地区・第1次移住地・第2次移住地の集落ぐるみといえる状況に及ばないにしても、都市における信徒の状況と比較すれば、信徒世帯が地区内で相当の割合を占める集住状況にある。また信徒の多くが農業および兼業等において同業関係にあるため、地区における信徒および同業関係の割合を2軸とする宗教コミュニティの4類型に関して、意図的コミュニティに位置づけるのが妥当であろう。

その根拠の一つは、意図的コミュニティの特徴といえる信仰領域を越える生活の共同が確認できることである。実際、大正期に設立された平戸口社会館や教会の奨学金等であり、田平地区出身の信徒が移住先・他出先において同じ宗教コミュニティを形成する傾向がある。とはいえ、近年の移動では、個別の他出が一般化していることも事実である。

なお、本稿が平成24年度～27年度科学研究費助成事業による研究（研究代表者叶堂隆三「移動と定住における類縁関係の発動と制度化に関する研究」課題番号24530641）の成果の一部であることを付記しておく。

注

（1）出津小教区における明治以降の信徒数と受洗者数から地区の普通出生率を推計したところ、明治・大正期の大半の時期で全国平均を10‰も上回る相当に高い数値に達し、多子状況の恒常化が推測できる（叶堂2014年14頁）。

（2）田平地区の移住世帯の出身地区の社会的状況に関して、佐世保市黒島地区・長崎市外海地区出津については叶堂2014年、佐世保市褥崎地区ついては叶堂2015 年a、長崎県五島地域については叶堂2011年を参照のこと。

（3）この数値は、『外海町史』（1974年）と数字が若干異なっている。『外海町史』では1886年にド・ロ神父が田平地区（小教区）の山野1町歩を購入して4家族を開拓移住させた後、1888年にも田平地区（小教区）の土地3町3段余を購入し9家族を移住開墾させ）その後も瀬戸山地区・小手田地区・下寺地区などに移住させること、また平戸島の紐差地区に7町余の山林原野を買い与え、18世帯97人を開拓移住させている（外海町史597頁）。

（4）ド・ロ神父の宣教戦略については、叶堂2014年参照のこと。ラゲ神父は開拓移住後の田平に数度訪問して、ミサをあげたという（浜崎22頁）。

（5）吉村兵蔵は、潜伏キリシタンの系譜を隠して田平地区に居住していたという。田平への開拓移住が開始された時に、田平教会附近の土地を購入して移住信徒の一員になっている。こうした事情から、吉村は成人洗礼で、田平における受洗第1号とされる（浜崎15頁・24頁）。

（6）『紐差修道院創立100周年誌』（1980年）には、

1915（大正４）年に４名とある（お告げのマリア修道会 23 頁）。

（７）神崎小教区は、1930 年に平戸口社会館をモデルにして、神崎社会館を設立する。福祉サービス（季節托児所）・医療サービス（診療所で診療・薬代等は県費補助で半額）・衛生サービス（理髪所）・教育教養サービス（図書館）・職業教育（授産場・裁縫塾）が提供され、一時は港外に留まる船に乗船客・郵便をはしけで移送する業務も担当していた（神崎教会献堂 50 年記念 59 頁・叶堂 2015 年 b）。

（８）墓地の利用区分は、１号墓地が、原則として、権利金を支払い信徒の義務を果たした信徒世帯、２号墓地が、権利金を支払っていない世帯・信徒の務めを果たしていない世帯である（浜口 60 頁）

（９）2015 年５月に平戸口教会の鍋内正志司祭に聞き取り調査を実施した。

（10）2015 年５月に福岡市西区能古島大泊地区・能古島教会の永田夫妻に聞き取り調査を実施した。

文献

浜崎勇、瀬戸の十字架―田平のキリシタン 100 年の歩み―、田平カトリック教会、1975 年。

長谷功、平戸口教会史―献堂 50 周年記念―、カトリック平戸口教会、2002 年。

100 周年記念誌編集委員会、永遠の潮騒―田平カトリック教会創設 100 周年―、田平カトリック教会、1986 年。

叶堂隆三、上五島カトリック集落の選択的移動と地域社会の維持―送り出し集落と定住地を結ぶ類縁関係・地縁関係・親族関係―、下関市立大学論集第 140 号。2011 年。

叶堂隆三、長崎県のカトリック信徒の移住と宗教コミュニティの形成―家族戦略から生成された地域戦略と外国人神父の宣教戦略―、下関市立大学論集第 148 号、2014 年。

叶堂隆三、第２次移住地への移住とコミュニティ形成―長崎県北松地域褥崎地区―、下関市立大学論集第 150 号、2015 年 a

叶堂隆三、長崎県佐世保市神崎地区におけるコミュニティ形成―第２次移住地への移住とコミュニティ形成―、やまぐち地域社会研究 12 号、2015 年 b。

川上秀人、長崎県を中心とした教会堂建築の発展過程に関する研究（報告書）、1985 年。

旧能古村関係資料、発行者・発行所・発行年不詳。

黒島カトリック教会記念誌編集委員会、信仰告白 125 周年黒島教会の歩み、黒島カトリック教会、1990 年。

長崎県の地名、平凡社、2001 年。

長崎県農地改革史編纂委員会、長崎県農地改革史、長崎県農地改革史編纂委員会、1953 年。

長崎県知事公室世界遺産担当、長崎県世界遺産「構成資産等基礎調査」地域・地区報告書　平戸地域、2008 年。

農林省農務局、開墾移住ニ関スル調査（第３輯）、1938 年。

お告げのマリア修道会、紐差修道院創立 100 年誌、お告げのマリア修道会、1980 年。

褥崎カトリック教会編集委員会、褥崎 128 年―褥崎小教区沿革史―、褥崎カトリック教会、1992 年。

聖ベネディクト神崎教会記念誌編集委員会、聖ベネディクト神崎教会、聖ベネディクト神崎教会、2005 年。

外海町史、1974 年、外海町役場

田平町郷土誌編纂委員会、田平町郷土誌、田平町教育委員会、1993 年。

高田茂廣、能古島の歴史、能古島小学校 100 年誌、1985 年。

瀧山三馬、御厨今昔、御厨今昔刊行会、1972 年。